

## 表紙, 目次, 抄録, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38001">http://hdl.handle.net/2297/38001</a>

大正六年五月一日發行

金澤醫學  
專門學校

# 十全會雜誌

卷二十二第

號五第

(號六十三百第)

金澤醫學專門學校十全會

金澤醫學專門學校 **十全會雜誌** 第二十三卷第五號 **目次**

○原 著

○實驗的血液過糖症ニ對スル「アルコホール」ノ作用  
醫學博士 田 村 昌……………一

○同側喇叭管ニ反覆セル子宮外妊娠ノ一例  
織田他家男……………七

○糖尿病ニ於ケル膵臟ノ變化ニ就テ  
醫學博士 中村八太郎……………三

○慢性腎臟炎ニ對スル炭酸ナトリウムノ作用ニ就テ  
近 藤 清 吾……………三

○纂 說

○肺デストマ「パラゴニムス、ウエステルマニ」病ニ關スル現今ノ知識  
醫學科第三學年生 本 田 蘭……………三

○學 會

○金澤外科集談會第一回例會演說要旨……………三九

○金澤皮膚科集談會第十六回例會演說要旨……………四一

○抄 錄

內 科 學……………六件……………四

小兒科學……………三件……………四

神經科學……………四件……………四

醫 化 學……………五件……………三

細 菌 學……………六件……………六

眼 科 學……………二件……………三

外 科 學……………三件……………三

皮 膚 科 學……………五件……………三

婦人科及產科學……………四件……………七

○漫 錄

印度見聞記。(其二)……………川久保俊一……………三

○雜 報

●近時米國學界ノ勢向。●海軍軍醫ノ缺乏。●文部省ノ計畫案。●昨年ノ醫師生産數。●衛生教諭特別任用。●第一回醫師試驗合格者。●石川縣醫師會定期總會。●金澤病院火災保險。●金澤皮膚科集談會。●金澤外科集談會。●金澤病院醫事集談會。……………七

○校 內 消 息

●昭靈皇太后三年祭式。●入學宣誓式。●新入學生諸氏を迎ふ。●金澤醫學專門學校規則中改正。●本學年各級長任命。●本學年各年級幹生。……………六

○會 報

●十全會役員委囑。●准特別會員。●十全會圖書室報……………八

○叙 任 及 辭 令

●內閣。●宮内省。●文部省。●陸軍省。●海軍省。●金澤醫學專門學校。●石川縣……………三

○人 事

●宮田教授。●佐崎教授。●山本講師。●内田講師。●近藤前講師。●高安校長。●山村茂一氏。●佐々木茂雄氏。●青木正枝氏……………六

○會 告

●校外特別會員會費納付調書……………六

新 竹 醫 院 長



中 川 醫 學 博 士

○金澤外科集談會第一回例會 (大正六年三月十二日)

一二ノ泌尿器結石「レントゲン」像ノ「デモンストラチオン」

ドクトル 飯 森 益 太 郎

身体内異物ヲ檢スルニハ從來視診及觸診ニ由ルノ外ナカリシガ一八九五年「レントゲンストラールン」發見以來之レヲ應用シテ其ノ存在ノ有無、部位、並ニ物体ヲモ確認シ得ルニ至レリ蓋シ該線ハ唯金屬及骨質ノ如キモノハ明ナル陰影ヲ止メ得ルモ其他ノモノハ尙ホ全ク明瞭ナル陰影ヲ生セシムルニ到ラザルヲ憾トス。

寫眞ノ一、 四歳ノ男兒昨年二月以來尿意頻數アリ血尿ナシ、同年十一月頃ヨリ其ノ症狀増劇セシヲ以テ本年二月中旬來診ス、先ヅ結石ニ疑ヲ置キシガ「ブージ」検査ヲ行ヒ難ク、試ミニ「レントゲンストラールン」照射ヲ行ヒシニ稍明瞭ニ膀胱部ニ於テ丸キ大サ約五厘錢大ノ黑影ヲ認メシメタリ。

寫眞ノ二、 四十二歳ノ農夫、數年前盲腸炎ヲ患フ、爾後屢腹部鈍痛ヲ來スノ癖アリ本年ニ至リ其ノ腹痛稍増劇シ且ツ血尿ヲ見ルコトアリ本月上旬初診、前例ノ如キアリ、好奇心ヲ以テ「レントゲンストラールン」撮影ヲ試ミタルニ右側腎臟部ニ當リ約小指頭大ノ丸キ不明瞭ナル黑影ヲ留ム、觸診上右腎臟ノ腫脹等ナカリシモ或ハ腎臟若ハ輸尿管ニ存スル處ノ結石ナランカ。

皮角ヨリ發生シタル表皮癌ノ一例

醫學博士 下 平 用 彩

患者六十九歳ノ老男、昨大正五年六月八日來院、三年程前左下腿前面ニ指頭大ノ軟キ腫物ヲ生シ漸次増大シ昨年夏頃ヨリ潰瘍トナリ且ツ同年暮頃ヨリ左股腺部ニ硬結ヲ見ルニ至リタリト、左下腿ノ潰瘍ハ約手掌大ニシテ表面凹凸不正、惡臭分泌物アリ、又右下腿上部ニモ不定型大小ヲ異ニスル數個ノ隆起物即皮角ヲ認ム、依テ左下腿ノ病症ハ右下腿ト同様皮角ノ表皮癌ニ變セシモノトスト該患者ノ全身寫眞ヲ供覽セリ。

討論。森田隼三君 皮角ハ老人ニ多ク小兒ニ稀ナルモ余ノ一例ハ十四歳ノ男子右側頸部(約拇指頭大)及左大腿後側部(約小指頭大)ニ各一個ノ皮角ヲ有スルハ實ニ稀有ナリトテ寫眞供覽アリタリ。

再ビマーデルング氏腕關節畸形ニ就テ

醫學博士 下 平 用 彩

本例ハ嘗テ金澤病院醫事集談會ニ於テ講演シタル同患者ナルニ由リ題シテ「再ビ」ト冠シタルニアリ。

患者二十二歳ノ處女、十四歳ノ頃ヨリ兩腕關節ニ畸形鈍痛ヲ來スト云フ大正二年六月十二日來院其ノ畸形並ニ「レントゲン」像ハ全クマーデルング氏報告ノ畸形症ニ一致スルモノナリト該畸形發生ノ病理等ニ關シ講述セリ尙詳細ハ十全會雜誌原著ニ報告スベシ。

腸ノ伸張潰瘍ノ一例

江沼郡立病院 七 五 三 龜 吉

第一例、七十三歳ノ男、六、七年前來時々腹痛發作、嘔吐アリ靜臥スルニ常ニ輕快ス、本年一月廿七日又同様腹痛アリ靜臥スルモ輕快セス、且ツ便秘ヲ伴ヒ左腸骨窩部ニ膨隆ヲ生シ症狀漸次増劇ス、二月十二日腸閉塞症ノ下ニ手術施行、左腸骨窩膨隆部ヲ切開スルニ結腸S字狀部ハ強度ノ糞便堆積ヲ以テ著シク擴張シ其ノ後面骨盤ト癒着シ剝離ノ際穿孔ヲ來セリ(蓋シ糞便ハ漏レタルモ柔軟ニシテ器械的壓ヲ腸壁ニ加フルコトナキモノ、如シ)更ニ同穿孔部ヲ開大シテ糞便ヲ漏シ術ヲ了ル。

第二例、二十三歳ノ女昨年九月子宮病ニテ婦人科の手術ヲ受ケ、同年十二月下旬強度ノ腹痛アリ腹膜炎トシテ醫藥ヲ服シ爲ニ輕快ス、本年一月頃ヨリ便通障礙漸次高度トナリ、二月ニ至リ吐糞症ヲ來シタリ二月十七日初診子宮腔部ト直腸ハ強癒着ヲ呈シ直腸ハ漸ク小指ヲ通スル如ク強度ノ狹窄アリ腹部著シク膨滿シ腸蠕動亢進ス右腸骨窩部ニハ著明ノ膿瘍ヲ認ム依テ二月十八日右腸骨窩膿瘍ヲ切開シ多量ノ膿ヲ漏シタルニ症狀頓ニ輕快シタルモ尙便通ヲ見ズ、翌十九日創内ニ盲腸及上行結腸部ノ著シキ膨出部アリ人工肛門ノ目的ヲ以テ之レヲ截開シ多量ノ糞便ヲ排泄シタリ。要スルニ二例共ニ慢性腸狹窄症ニ基ク結腸ノ擴張ニシテ其部ヲ截開シタル粘膜炎ニハ蹠蹠点大乃至小指頭大ノ潰瘍數多ヲ生シタルヲ認ム其潰瘍ハ所謂コツヘル氏ノ立論ニ基キ且ツ下平博士ノ實驗的證明ニ由ル「デーヌングス、ゲシウエール」ナリト論結セリ。

○金澤皮膚科集談會第十六回例會 (大正五年十二月十二日)

黴毒再感染ノ一例

澤田一郎

患者U、T男二十四歳、昨年八月福岡醫科大學旭教授「クリニク」ニ於テ初期黴毒ナル診斷ノ下ニ「サルバルサン」三回及楊朮注射十一回ノ注射ヲ受ケ全治セリ當時ノ症狀ハ硬性下疳及無痛性橫痃ナリシガ如シ本年六月癩疾ヲ以テ余ガ

許ニ來レリ現症ハ痲毒性前部尿管炎ニシテ他ニ臨床ニ微毒症狀ナクワ氏反應亦陰性ナリキ超ヘテ八月下旬感染ノ機會  
ナキニ以テ「ヘルペス」様出ヲナスヲ得サリシモ其症狀酷ク初期硬結ニ似タリ驅微療法ヲ行ハズシテ專ラ痲疾治療  
ノミヲ續繼シツ、經過ヲ觀察セシニ十月上旬即感染後約六週餘ニシテ廣汎性ニ蓄微疹ヲ發生シテ胸腹及上腿内側ニ  
著シク其狀微毒性「ロゼオラ」ノ早發型ニ一致シ且之ニ先チ兩側鼠蹊腺多數硬結及右側肘脈ノ稍々腫脹セルヲ認ムワ氏  
反應強陽性、因テ「エーラミゾール」注射ヲ行ヘシニ皮疹ハ二日ニシテ腿色シ陰部硬結ハ一週餘ニシテ全ク痕跡ヲ留メ  
ザルニ至ル爾來同注射二回ニ併セテ汞劑注射二十回餘ヲ施シ今日ニ及ベリ本患者ノ如キ微毒再感染症トシテ記スベキ  
價値アルモノナランカ。

## 稀有ナル尿滲潤ノ一例

山田孝太郎

某 男 四十二年 機業 初診大正五年十二月十二日

既往歴、大正五年十二月九日ヨリ不快ナリトテ十日朝醫ノ來診ヲ求メタルモ此日ハ尙終日自ラ廁ニ行キテ利尿シ翌  
十一日午前中ハ布団ニ倚坐シツ、アリシガ十二日午前四時頃ヨリ精神朦朧トナリ應答セズ又飲食セザリキ、十日醫ノ  
來診ヲ乞ヒタル時ハ既ニ陰囊ノ甚シク腫大セルヲ知リタリ然レモ痲攣發作又ハ嘔吐等ナク患者ハ數年前ヨリ利尿ニ甚  
ダシク時間ヲ要シ放尿ハ点滴狀ナリシト云フ。

現 症、熱三十七度一分脈九十八至比較的緊張ス、精神昏朦シ更ニ應答ナシ、瞳孔散大反應遲鈍、無意識ニ時々右  
下肢ヲ轉動シ痛ヲ訴フ呼吸ニ喘鳴ナク四肢ニ浮腫ナシ、陰囊ヲ檢スルニ大人頭大暗青黑色ヲ呈シ腹壁ハ臍部ニ至ル迄  
溼潤腫脹シ左腹壁ニハ掌大ノ表皮下囊胞ヲ見暗青黑色ノ液ヲ盈ス、陰莖ハ牽引セラレ龜頭ハ深ク包皮内ニ陥入シ尿道



口ヲ發見スルヲ得ズ包皮ハ翻轉シ得ズ、ヨリテ包皮ノ前壁ヲ剪去シ最小「カテーテル」、「ブジー」等ヲ試ミシモ導尿シ得ズ其都度痛ヲ訴ヘ努力シ尿道口ヨリ少量ノ尿ヲ出ス膀胱内蓄尿ノ程度ハ腹壁溼潤ノ爲メ不明、試穿刺モ針短キ爲メ目的ヲ達シ得ズ同日午後陰囊及腹壁ニ十數個所ニ切開ヲ施シ混血尿數百瓦ヲ出シ陰囊ヲ舉上スル事ヲ得タリ會陰部ハ少シク腫脹スルモ浸潤ナク唯尿道ハ甚ダシク硬固トナリ忽チニ會陰切開ヲ施サント欲セシモ脈搏漸次不良時々吃嘔アリ死期近キヲ以テ手術ヲ中止ス十三日午前七時落命ス。

本患者ハ既往症ニヨリソノ甚ダシキ狭窄アル事ヲ推知スルヲ得ルモノノ如何ニシテ尿道ニ損傷ヲ受ケシヤ恐ラクハ尿道ノ後部ハ擴張シ尿ハ利尿毎ニ一部該部ニ遺殘シタル爲メ腐敗シ努力ニヨリテ破壞セルモノナランカ唯患者ガ如斯重難ニ達スル迄目ヲ上廁シ或ハ職業ヲ執リツ、アリシヲ怪シムノミ。

## 若年者ノ異常部位ニ發生セル老人性疣贅ノ一例

醫學博士 土 肥 章 司

開敷某男 三十三歲 患者ハ淋疾ノ治療ヲ受ケンガ爲メ皮膚科外來ニ來タレリ、然ルニ兩側下腿ノ屈側ニ於テ相對的ニ多數ノ老人性疣贅ヲ發見セリ、大サハ多クハ豌豆大乃至爪甲大ナルモ往々半米粒大ノモノモアリ、汚穢黃褐色ニシテ皮膚面ヨリ僅ニ隆起シ、表面表平ナルモ粗糙ナリ、自覺的障礙ハ毫無シ、同様ノ發疹ハ大腿ノ屈側面ニモ多數ニ存シ、其他右側手背前膊及上膊ノ伸展側ニ約二―三十個アリ、左側上肢伸展側ニハ十數個ヲ認メ、顔面ニハ下顎部ニ小豌豆大ノモノ一個アリ胸部頸部背部ニハ存在セズ。

患者ハ体格小、營養不良、貧血、神經質ナリ、發疹ノ初發ハ約二十歲前後ニシテ最初下腿ニ之ヲ認メタリト云フ。元來老人性疣贅ハ五十歲以上ノ者ニアリテハ多少ハ殆常ニ認ムル所ナルモ、患者ノ如キ若年ニシテ初發シ、且好發部位タル顔面胸部背部ニ無クシテ、却テ下肢ノ屈側ニ多數ニ存在スルガ如キハ極メテ破格ニシテ稀有ノ症例ト信ズ。

## 抄 録

## 內 科 學

## ○脚氣屍副腎「アドレナリン」

含有量ニ就テ

(東京醫學會雜誌三十一卷五號)

大 野 精 七

コメサッチ氏ノ「アドレナリン」定量法即副腎越幾斯ノ昇  
 汞赤色反應ニヨル比色定量法ヲ用ヒ本邦人ノ左側副腎ア  
 ドレナリン」量ヲ大人七十九人ニ付テ測定シタルニ平均  
 二・八二麩ヲ得タリ、インデル、シモール氏ノ二・三〇麩  
 ヨリ稍々多量ナリ之ヲ本邦人副腎「アドレナリン」ノ普通  
 常量トシテ十二例ノ脚氣屍副腎ノ「アドレナリン」ヲ見ル  
 ニ殊ニ急性脚氣ニ在リテ著シク増加シ五・七六麩乃至一  
 四・九五五麩ナリ、慢性的ノモノニシテ妊娠脚氣ノ二例モ  
 急性ニ比シ少シト雖モ、尙常量ノ上ニアリ即二・〇二一—  
 四・九四麩ナリキ。

故ニ脚氣ニ於テハ通常以上ニ「アドレナリン」分泌作用元  
 進セル者ト見ルヲ得可キカ、此ノ「アドレナリン」分泌過

多ガ脚氣病ト原因的關係ヲ有スルモノナル可キヤ、不明  
 ナレト、何等カノ形ニ於テ關聯スルモノナル可シ。

(內科學教室田村抄)

## ○結核性腹膜炎ノX光線治療ニ就テ

(日本消化機病學會雜誌第十六卷第二號)

ドクトル 宮 原 立 太 郎

著者ハ從來結核性腹膜炎ノ內科及外科の療法ノ困難ナル  
 事ヲ感ジ輒近理學的ノX光線療法ノ採用スベキヲ論ジタ  
 リ。先ツ最近結核性疾患ニ關スル先輩ノ業績ヲ略述セリ而  
 シテ著者ガ實驗セル結核性腹膜炎二十七例中九例ニ就テ  
 其病歴ヲ略記シX光線療法ニ對シテ左記ノ成績ヲ得タリ  
 一、硬結性ノモノハ最モ治癒シ易シ。

二、著シキ硬結及漿液ナク單純ナル鼓腸ヲ有スルモノモ  
 治癒シ易シ。

三、漿液性ノモノハ比較的吸収ニ時日ヲ要ス。

四、既ニ豫後不良ノ場合モ一時病竈周圍ノ組織ガ餘力ヲ  
 出シ疾病ニ對抗スルモ遂ニ組織衰弱シ反應ノ爲メニ増  
 悪ス。治癒轉歸ノ説明ニ關シテハ從來X光線治療ノ効  
 果ハ組織ノ感受性ヲ以テセシガ最近免疫學的方面ヨリ  
 説明シ其免疫性物質ノ發生如何ハ治癒轉歸ニ重大ナル  
 關係アリトセリ、即チ慢性ニ經過シ免疫性物質ノ產生

多キ慢性硬結性結核ハ恰モ之ノ期ニ適當セルモノニシテ最効果アリト、故ニ氏ハ副作用ヲ起サル範圍ニX光線ヲ應用シテ徐々免疫性物質ヲ發生セシメ結核性肉芽組織ノ破壊ヲ企ツト論ゼリ。

腹膜結核ノ治療ニ對シテX光線硬管ヲ一「ミリ」以上ノ「アルミニウム」濾過ニテ三乃至四宛凡一週間ノ間隔ヲ以テ放射シ尙副作用ニ注意シ分量時日ノ増減ヲ爲スベシト。(内科學教室佐々木抄)

### ○「デング」熱ニ就テ

(日新醫學第六年第六號)

理學士臺灣總督府研究所技師 小 泉 丹

同 技師 山 口 謹 爾

臺灣總督府醫院醫官 殿 村 京 造

著者等ハ、昨年五月ヨリ十月迄ノ台灣ニ於ケル、流行ノ經驗ニ基キ、本病ノ流行史、症候學等ヲ詳述シ、殊ニ病原体ノ性狀、及傳播徑路ニ關シ、人体ニ實驗的研究ヲ行ヘリ。本病病原体ハ、猶不明ニシテ、細菌原因論、原蟲病原說共ニ否定セラレ、目下多數學者ハ可濾性病原体說ニ傾ケル如シ、著者等モ其濾過性ヲ證明シ、病毒ハ血液ニニアリテ、患者血液量〇・〇〇〇〇五坵ニテモ一・〇坵

ト大差ナク發病シ得、潜伏期ハ六七―一七二時間ヲ要ス、而カシテ病毒ハ發熱ノ次日ヨリ第六日迄、即解熱日迄ハ患者ノ血液中ニ存在ストナセリ。本病病毒ハ蚊ニ依リテ傳播セラル、モノニシテ、先キニグラハム、アシユバーン、クレীগ氏等ハ其種類中「キューレックス、ファチガン」ナル事ヲ證明セリ、著者等ハ四種ノ蚊ハ即チ「ステゴミア、スクテラーリス」「デスポイディア、オブチュルバンス」「キューレックス」ノ種類(「キューレックス、ファチガン」)「キューレックス、イムペレンス」「マンソニア、ウニフォルミス」ヲ用ヒ、其中患者ヨリ吸血後四日ヲ經タル「ステゴミア」ノ刺咬ヲ受ケテ後三日十六時間ニテ發病セシ十分注目ニ値スル一例ヲ得タリ。其傳播方法ニツキテハ、蚊ニ吸引セラレシ病原体ノ、更ラニ蚊ノ刺咬ニヨリテ、器械的ニ人体ニ接種サル、說ヨリモ、蚊ノ体内ニ於テ發育變態ヲナシテ數日ノ後唾腺ニ移リ居ルトノ說ニ、左祖セント欲スト。猶本病ノ先天性、後天性免疫ヲ實驗的ニ證明シ、殊ニ後天性免疫ニハ、恢復三箇月間ハ之レヲ有シ、恐ラク一年内外ハ持續シテ保有スルモノナラント云フ、又本流行時ニハ再感者ノ確實ナルモノニ遭遇セザリシト。(内科學教室殿村抄)

## ○早期微毒性黃疸ノ一例

(臨床醫學第四年第二號)

近藤 清 吾

微毒ノ早期ニ肝臟ノ侵サル、コトハ比較的稀ニシテ且ツ皮嫩科ノ智識ヲ欠ケル内科ノ診斷ノミニテハ往々看過セラル、ニ似タリ、所謂早期微毒性黃疸ノ如キハ其適例ニシテ診斷不明ノ爲メニ其治療方針ヲ誤ラバ不測ノ禍ヲ招クコトナキヲ保セズ、著者ハ我ガ國ノ文献ニ斯クノ如キ報告ノ殆ンド發見シ得ザリシヲ以テ、自家ノ實驗例ヲ揚ゲ其症候、處置、黃疸發生ノ病理、豫後等ニ就キテ縷説シ臨床醫家ノ注意ヲ促セリ。

實驗例ハ二十六歳ノ婦人ニシテ約一ヶ月半不明ノ重症黃疸症トシテ治療セラレ甚重篤ニ陥リタルモノナリ、精檢ノ結果良人ハ初診時(大正四年十月十五日)ノ夏季ヨリ第二期微毒ノ治療中ナルヲ知レリ、而シテ患者ニハ舉子二人、最終分娩ハ大正四年二月ニシテ流産ナク現症發生前ニ微毒ノ既往症ナシ、大正四年五月頃外陰部肛門附近ニ小ナル硬結物ヲ生ゼシガ約一ヶ月ニシテ漸次消退シ越エテ九月初旬ニ至リ初メ感冒ノ氣味アリ惡寒發熱ト同時ニ全身著明ノ黃疸及全身殊ニ四肢及背部ニ多數ノ暗赤色ノ發疹ヲ生ジ大サハ帽針頭大ヨリ豆大ニシテ表面隆起セ

ルヤ否ヤ明カニ記憶セズト云フ、入院當時加答兒性黃疸ノ處置無動却ツテ増惡セリ、ワッサーマン氏反應ハ強陽性、此處ニ於テカ「サルゾルサン」其他ノ驅微療法ヲ試ミ甚ダ迅速ナル治効ヲ收メタルモノナリ。(自抄)

## ○糖尿病患者ノ胃ノ官能ニ就キテ、

附胃腸障礙ヲ前驅セル糖尿病性昏

睡ノ三例

(臨床醫學第四年第三號)

近藤 清 吾

本編ニハ先ヅ糖尿病患者ノ固有的食餌療法ニ當リテ胃官能ヲ知ルノ緊要ナルコトヲ前提シ、次イデ其文献ヲ略述シ著者ガ最近五ケ年間ニ亘リテ百二十名ノ真正糖尿病患者ニ就キテ胃内容檢査成績ヲ發表シ且ツ胃腸障礙ヲ前驅セル糖尿病性昏睡ノ三例ヲ細説シ、次キニ左ノ如キ結論ヲ與ヘタリ。

- 一、余ノ實驗成績ニ據レバ糖尿病患者ニシテ何等胃ノ自覺症候ヲ有セズ其大多數ハ食慾亢進セルニモ拘ハラズ
- 其二四・九%ハ游離鹽酸缺如シ、減酸者ヲ合スル片ハ四九・八%ノ多數ニ上レリ。
- 二、胃症ヲ有スル者ノ二〇・〇%ハ游離鹽酸缺如シ、六四・〇%ハ過酸ナリ。

三、一般ニ胃ノ游離鹽酸ハ減酸ニアラズンバ過酸ニシテ  
正常ノ範圍内ニアルモノハ比較的少シ。

四、余ノ調査成績ニ據レバ糖尿病患者ニ於ケル胃ノ運動  
力障礙ハ比較的少ナシ。

五、重症ナル糖尿病患者ノ胃腸障礙ハ殊ニ治療者ノ最モ  
注意スベキコトナリト信ズ。

六、余ハ以上ノ實驗成績ニヨリ糖尿病患者ノ固有的食事  
療法ニ先チ必ズ胃内容検査ヲ行ヒ胃腸障礙ヲ未發ニ防  
グベキコトヲ推奨ス。

七、尿中ノ糖量ト游離鹽酸トハ著明ノ關係ヲ有セザルガ  
如シ。

八、糖尿病患者ハ營養障礙、多食、及蛋白偏依食トヲ有ス  
ルニ拘ハラズ胃ノ自覺的症候ヲ訴フルモノ余ノ實驗セ  
ル脂肪肥胖症患者ニ比シ約半數ニ(二五%)ニ過ギズ。

○ 蟲様突起炎ト誤リ易キ右輸尿管結石ニ就テ

管結石ニ就テ

(臨床醫學第四年第十一號)

近 藤 清 吾

右輸尿管結石ト蟲様突起炎發作トハ互ニ錯誤ヲ來ス場合  
多クアルベキモ一般ニハ之ニ注意スルモノ少シ、著者嘗

ツテ American Medicine 誌上ニ於テ。

「所謂蟲様突起炎發作屢、アリテ之ヲ手術セルニ、盲腸部  
及蟲様突起ニハ何等ノ變化ナク、精査ノ結果、ソガ右輸  
尿管結石ナリシコトニ遭遇セルコト屢、ナリ、故ニ内科  
醫外科醫ハ共ニ注意スベシ」

トノ報告ヲ讀ミテ茲ニ年アリ、タマ、一患者ノ(年齢  
四十歳、男、農、初診大正四年十二月十一日) 既往十數  
回ノ盲腸部ノ激痛發作ト惡寒發熱トヲ訴フルニ遭遇セリ  
肉眼的ニ血尿又ハ尿意頻數等ナシ、他醫ハ以テ皆悉ク盲  
腸炎又ハ蟲様突起炎ノ診斷ヲ下セリ、著者ハ諸多ノ既往  
症現症ヲ總合シテ右輸尿管結石ナルコトヲ豫想シ最後ニ  
手術的ニ之ヲ摘出シテ確證セリ。

成書ノ記載ニヨレバ輸尿管結石ノ篋留スル部分ハ通常輸尿  
管ノ生理的狹隘部分ニ於テシ、其部ハ

一、輸尿管起始部ニシテ腎盂ニ接スル部

二、輸尿管ノ腰部ヨリ骨盤部ニ移行スル處ニシテ輸尿管  
ノ下三分ノ一ノ部

三、輸尿管ノ膀胱開口部ニシテ、第一ノ部分最多ク第三  
之ニ次ギ第二ノ部分最少シト云フ

著者ハ輸尿管結石ノ症候其他ヲ略述シ最後ニ曰ク「輸尿  
管結石ハ諸多ノ要約ニヨリテ其症候甚ダ多種多様ナルベ

キモ亦結石ノ位置ニヨリテ此處ニ發現スベキ症候ニ多少ノ差異アルハ想像シ得ベシ、即チ輸尿管結石ニシテ前記ノ第一狹隘部ニ篋留スルキハ腎臟結石ト殆ンド同様ナル症候ヲ呈スルコト多カルベク第三狹隘部ニ於テハ膀胱結石ニ稍近キ症候ヲ現ハシ第二ノ狹隘部即チ下三分ノ一部ニ占居スル場合ニ於テハ(右側ノ場合)余ノ症例ノ如ク排尿等ニ直接著シキ關係ヲ有セザル蟲樣突起炎樣症候ヲ呈スルコト比較的多キニ非ラズヤト。(自抄)

## 小兒科學

○愛知縣下ニ於ケルハイネ、メヂ

ン氏病ノ統計的觀察

(中央醫學會雜誌第百三十一號)

武藤新太郎

著者ハ愛知病院外來患者日誌ニヨリ過去三ケ年間ニ於ケルハイネ、メヂン氏病ノ統計的觀察ヲ論シ左ノ如ク結論セリ。

- 一、本病ハ患者總數ノ一・二%ニ相當ス。
- 二、男兒ノ罹患數著シク多數ナリ(男兒六三・六%女兒三六・四%)。

三、愛知縣下ノ郡部ニ於テハ知多半島ノ伊勢灣ニ面スル沿岸ノ部落ニ多キガ如シ。

四、發熱季節ハ六月最モ多ク八月七月之レニ次グ春秋之レニ次ギ冬季ニ最モ少シ。

五、固定麻痺ノ部ハ下肢ニ最モ多ク上肢之レニ次ギ下肢ニ於テハ右側ニ多ク上肢ニ於テハ左側ニ多キガ如シ。

(小兒科教室金子抄)

○本邦人ニ於ケル心臟卵圓孔開存ノ頻度ニ就テ

(大阪醫學會雜誌第十六卷第三號)

木崎正美

泰西ニ於ケル卵圓孔ノ開存ハ三十二%乃至五十%ナリ著者ハ大正四五年程度ニ於ケル大阪醫科大學病理教室ノ屍體解剖ニヨリ左ノ結論ヲナセリ。

一、屍體解剖例二百三十二例(二例ノ胎兒ヲ除外ス)中卵圓孔ノ開存ハ四十一例ニ於テ存在ス即チ約十七%ニ當ル。

二、十五歳未満ノ屍體ニ於テハ約四十七%、二十歳以上ノ屍體ニテハ約十%ニ於テ卵圓孔ノ開放ヲ見ル。

三、男女ノ關係ニ於テハ男子ハ二十一%、女子ハ十三%ナリ。

四、統計材料尙ホ僅少ナルヲ以テ之レヲ確言シ得ザルモ本邦人ニ於テハ卵圓孔ノ開放ハ泰西人ノソレニ比シ少キガ如シ。(小兒科教室金子抄)

### ○急性腦實質炎ノ一例

(兒科雜誌第二百二號)

福 武 勝 芳

著者ノ例ハ四年六ヶ月ノ女兒ニシテ始メ惡寒、頭痛等ノ症狀ヲ訴ヘ、四日目ヨリ定型の癲癇樣痙攣ヲ頻發シ同時ニ体温三十九度乃至四十度ニ上昇シ意識全ク溷濁シ昏愴狀トナリ脈搏頻數ニシテ弱ク、呼吸促進等ノ危險ナル狀態ニ陥リ急劇ナル腦症狀ヲ伴ヒタルヲ以テ時恰モ疫癩樣疾患、赤痢及急性腸加答兒ノ流行ヲ見タル八月ノコト、テ腸性ノ腦症狀トシテ處置セラレタリシガ、第五日目ニ熱稍々下降スルト共ニ左側ノ上下肢及顔面ニ弛緩性麻痺ヲ來シ腱反射全ク消失セリ其後意識ハ尙ホ依然トシテ朦朧タリ、患側ニ時々痙攣ヲ見、發汗甚シ次デ漸次体温下降ニ近クニ及ビ神識次第ニ明瞭トナリ、十日目ヨリ麻痺側ニ腱反射アラハレ漸次強盛トナル、二十五日目ニハ強直性麻痺ト變ジ腱反射亢進スルニ至レリ、經過中一回腦脊髓液ヲ檢シタルニ内壓亢進セル外特ニ注意スベキ所見ナク發泡液ノワ氏反應陰性ビルケ―氏皮膚反應モ亦陰性

抄 錄

ニ終レリ、以上ノ症狀ニヨリ定型の特發性腦實質炎ナル事毫モ疑フノ餘地ナシト云フ。(小兒科教室佐伯抄)

## 神 經 科 學

### ○バセドウ氏病甲狀腺腫ノ組織學的變

化ト其ノ臨床上所見トノ關係ニ就テ

(臨床醫學第五年第三號)

醫學士 土井留之助

バセドウ氏病三例ニ就キ其ノ右側ノ甲狀腺腫ヲ剔出シ甚ダ良好ナル結果ヲ來ダセルヲ舉ゲ且ツ剔出セル甲狀腺腫ニ就キ組織學的ノ所見ヲ述ベ臨床的ノ症候ト連關シ植物性神經系統トノ關係ニ就キ論ジテ曰ク本病ニ於ケル眼球突出、メービユース氏症候、熱發、心悸亢進、新陳代謝機能亢進、糖尿、尿崩、食餌性糖尿等ハ交感神經系統ノ興奮ノ狀態ニシテ眼裂擴大、グラーフ氏症候、涙液過多、發汗、呼吸障礙、胃液分泌過多、流涎、等ハ自律神經系統ノ興奮狀態ナリ、尙淋巴性素質、胸腺永存、「エオジン」嗜好細胞増加等モ又自律神經系統ノ興奮狀態ニ屬ス。

臨床上殆ド總テ定型性症狀ヲ有シ且其經過長キモノニ於

テハ甲状腺ノ組織學的變化、不規則的ナル圓壻上皮細胞増殖ニ加フルニ多形性ナル細胞核ノ變化ヲ以テシ濾胞内容ノ液化乃至空胞ノ形成著シク且ツ細胞脱落劇甚ナリ余ノ三例中、第一及第二例ハ經過比較的ニ短ク且ツ發生緩徐ニシテ諸症狀モ亦輕度ナルモノナリキ此如キ者ニ在リテハ甲状腺ニ於テ乳嘴狀突起増殖及肥大ノ程度ハ臨床上殆下總テ本病定型的症狀ヲ有シ經過長キ即チ重症ナリシ第三例ニ比シテ著シク輕微ニシテ濾胞内ノ膠樣物質ニ多少ノ側壁空胞形成ヲ檢鏡セルモ大體ニ於テ甚シキ液化乃至消失ヲ見ズ即チバセドウ氏病ノ經過、輕重等ハ甲状腺ノ組織學的變化ト一致スルモノナルコトヲ知レリ。

尙進ミテバセドウ氏病ト神經系統トノ關係ヲ檢索スルニ「シンバチコトニー」及「ワゴドニー」ノ諸症候ヲ具備セル第三例ニ於テハ組織學上、不規則的多形様ノ細胞増殖、肥大ニ兼ヌルニ著キ細胞核ノ變化ヲ以テシ濾胞内容ノ液化狀態モ亦特ニ甚シカリキ。第一例ニ見ルガ如キ其ノ症候殆下總テ「ワゴトニー」ニ屬セルモノモ第二例ニ於ケルガ如キ「シンバチコトニー」症候ニ偏重セルモノモ共ニ濾胞内膠樣質僅カニ液化シ空胞形成程度ナリキ而シテ前者ニ於テハ細胞増殖著シク多少不規則ノ配列ヲ爲シ細胞連結ノ弛緩ヲ示シ且稍々著明ニ脱落セル上皮、細胞核ノ形態

多樣ナルニ反シ後者ニ於テハ細胞肥大ノ可ナリ進行セルモノアリテ乳嘴狀突起形成著明ナルモ増殖ノ程度第一例ヨリ比較的輕微ナルヨリ推考スルニ上皮細胞ノ肥大性變化著シキ場合ハ臨床上「シンバチコトローベ」症狀ノ主タルヲ示シ上皮細胞増殖甚シク細胞脱落顯著ニシテ胞核變形ヲ伴フ場合ハ臨床上「ワゴトローベ」症狀ノ重キヲ爲シ組織學的變化強度ニ現ハル、トキハ臨床上兩神經系統ニ屬スル諸症候ノ著明ナルヲ見ル。

上記ノ所見ハアルベルト、コッヘル氏ノ豫報セシ圓壻狀上皮細胞増殖強度ニ營マル、場合ニ於テハエッピングルヘス氏等唱ハル「シンバチコトローベ」症狀著シク圓壻狀上皮細胞増殖ニ兼ヌルニ不規則的多形様ノ細胞増殖並ニ胞核變形及細胞脱落ヲ呈スル場合ハ「ワゴトローベ」症候同時ニ現ハレ全ク不規則的、多形様ノ細胞増殖、胞核變形及細胞脱落ヲ示ス場合ハ「ワゴトローベ」症候著明ナリトノ說ニ略一致スルモノナリ。

余ノ第一例ニ觀ルガ如ク其ノ症候殆下總テ「ワゴトニー」ニ屬スルハ稀有ノ場合ニシテエッピングルヘス氏等ハ甲状腺分泌液ノ寧ロ自律神經系統ヲ侵害スルニ因リテ起ルモノナリト爲シコストリビー氏ニ據レババセドウ氏病ニ於ケル元來ノ症狀ハ「シンバチコトニー」ニ屬シ「ワゴ



トニ一」症狀ハ寧ロ甲状腺内ニ誘發サル、代償的機能ノ結果ナリト爲ス。

最後ニ注意ス可キハ余ノ第一例ニ於テ臨床的胸腺ノ存在ヲ第三例ニ於テ組織學上強度ノ淋巴性病叢ヲ認メタルノ事實ニシテ胸腺肥大、永存ノバセドウ氏病ノ發生並ニ症候ニ大ナル意義ヲ有スルコトハ近年諸學者ノ唱導スル所ニシテ淋巴性素質又然リトスカペルレ及バイエル氏等ニ據レバ胸腺モ亦甲状腺ト同シク植物性神經系統ヲ侵害シ後者ハ主トシテ交感神經系ニ前者ハ重ニ自律神經系ニ影響スルモノナルガ如シ尙淋巴細胞ノ集簇ハ之ヲ單ニバセドウ氏病ニ於ケル甲状腺分泌液ノ刺戟ニ因ル反射的現象トシテ看過ス可キモノニ非ザルベキナリ。(神經科教室那谷抄)

○白癡ノ腦ニ於ケルアルツハイメル

氏神經細纖維變化ニ就キテ

(神經學雜誌第十六卷第一號)

東京醫科大學精神病學教室

醫學士 後藤城四郎

著患ハ四例ノ精神發育障害ノ高度ナル白癡患者ノ腦ニ就キテ研索ヲ爲シ其ノ中アルツハイメル氏細纖維變化ニ就キテ次ノ結論ヲ爲セリ。

一、白癡ノ腦ニ於テアルツハイメル氏細纖維變化ヲ見タ

抄 錄

リ而シテ予ノ検査シタル四例ニハ皆之ヲ證明シ得タリ。  
二、アルツハイメル氏細纖維變化ハ腦膜炎、腦實質炎性白癡及び單純ナル發育阻止ニ基因スル白癡ノアルモノニハ屢々起ル現象ナルベシ。

三、予ノ例ハ三十九年六月、三十八年十月、三十二年十月及ビ十一年九月ニシテ其年齡ハ從來アルツハイメル氏細纖維變化ヲ認メタル孰レノ老耄性癡呆ノ例ヨリモ著シ而シテ第三例第四例ハ從來該變化發見ノ最若年者ヨリモ尙著シ。

四、アルツハイメル氏細纖維變化ノ認メラレタル例ハ老耄性癡呆又ハ高年者ノミニ限ラレタルガ著者ハ小兒期ノモノニモ之ヲ見タリ。

五、アルツハイメル氏細纖維變化ハ老年變化ナリト云ハレタルガ決シテ然ラズシテ或ル一種ノ新陳代謝ノ産物ナルベシ而シテ此ノ變化ヲ起ス点ニ就キテハ白癡及ビ老耄性癡呆ハ同一ナル新陳代謝ヲ營ムモノナルベシ。

(神經科教室那谷抄)

○小腦ノ官能局在トノ關係

(Psych. en Neurol. Baslen 19, 181, 1915)

フルスホッフ

最近ノ研究ニ依リテ著者ハ小腦ノ諸官能ニ就キ次ノ如ク

一五一

結論セリ。

一、小腦ハ靜止的、起立的並ニ緊張的ノ官理ヲ筋肉ニ與  
フ、此ノ官能ハ全小腦ノ表面ガ同様ニ保有スルモノナ  
リ而シテ之ノ官能ノ障礙ニ依リ續發性ノ共同運動障礙  
ヲ來ス。

二、小腦ハ筋屬ノ運動ニ對スル官理ヲ爲ス故ニ小腦ノ官  
能障礙ニ依リ調和セザル運動ヲ爲ス之ノ官能ハホルク  
氏中樞 *Zeuthen Bolks* ニ局在スルモノナリ。

三、小腦ハ直接ニ筋肉ノ運動ヲ支配ス之ノ中樞モ又ホル  
ク氏ノ中樞ニ局在シ之ノ障礙ニ依リテ原發性ノ共同運  
動障礙ヲ來タス。

四、小腦ハ尙其他ニ身体ノ位置平均ヲ保持スル上ニ直接  
ノ關係ヲ有ス之ノ官能ハ小腦ノ被蓋核ニ終ル可キ第八  
對神經即チ聽神經ノ中ニ於テ行ハル。(神經科教室那谷抄)

### ○小腦ノ官能

(*Psych. en Neurol. Bladen 19, 241, 1915.*)

エルゲルスマ

小腦ハ總テノ隨意運動ノ調節ヲ司ル殊ニ複雑ナル隨意運  
動ノ調節ヲ司ル而シテ小腦ハ尙他ノ一面ニハ深部感覺ト  
身体平均並ニ緊張ヲ司ル機關即チ前庭神經ヨリ來ル衝動

ヲ受納調節シ其他ニハ何等他ノ官能ヲ有セズ。

之ノ如クニシテ小腦ハ正シキ歩行、言語ノ發達、顔貌ノ  
表情並ニ種々複雑ナル運動殊ニ上肢ノ運動ニ大ナル關係  
ヲ有ス之ノ結果人間ニ於テハ小腦ハ高等ナル發育ヲ爲ス  
ナレド小腦ハ大腦ノ支配下ニ立チ自働的ノ官能ヲ有セズ  
運動ノ調節ハ大腦ヨリ錐體道ヲ經テ筋肉ニ至達スルノミ  
ナラズ尙又大腦ト小腦トノ連絡ノ纖維ニ依リテ小腦ニ至  
達シテ然ル後小腦ヨリ再ビ筋肉ニ至達スルモノナリ。

又運動シツ、アル筋肉ヨリノ刺戟ハ深部感覺道ヲ通リテ  
小腦ニ達シ小腦ヨリ小腦上脚ヲ通ジテ視神經床、又鋸齒  
狀核ヨリ大腦ニ達ス而シテ大腦ハ運動像ヲ原發シ小腦ハ  
之ノ運動ヲ矯正スルモノナリ。(神經科教室那谷抄)

## 醫 化 學

### ○多核白血球ハ血清糖化酵素ノ

源泉トナルヤ

(福岡醫科大學雜誌第十卷第三號)

九大第二内科教室 醫學士 角 田 俊 吉

血液中ノ糖化酵素ハ主トシテ膵臟ニ於テ發生シ、唾液腺  
及腸腺モ亦其一部ノ源泉ヲナスト考ヘラル、モ、亦血液

中ニ於テ生成セラル、トナス者ナリ。

著者ハ Castellano et Paracca 氏等ガ血清ヲ血餅ニ永ク接觸セシムレバ、其糖化能力ヲ増加シ、而シテ此酵素ハ血液凝固ノ際崩壊スル白血球ヨリ血清中ニ移行シ、且血液ニ於ケル糖化酵素ノ大部分ハ主トシテ白血球ニ存在シ其崩壊ニヨリテ游離スルモノナリトノ説ヲ追試シ、Wohlgenuth 氏法ヲ用キテ一々其誤謬ヲ實驗的ニ立證セリ。

著者ハ更ニ家兔ニ一〇%ノ「スクレイン」酸曹達ヲ皮下ニ注射シ、人工的ニ白血球ヲ増加セシメ、血清糖化酵素量ヲ測定シタルニ、何等其ノ増加ヲ見ザルコトヲ附言シ、尙胸腹水ノ糖化作用ト其細胞所見、コトニ多核白血球トノ量的關係ハ會々兩者ニ於テ並行スルコトアルモ、其因果的關係ヲ認ムルコト能ハズ。只兩者ノ原因往々一致スルニ因ルモノナルベク、且ツ Haberlandt 氏ノ實驗セシ動物体内ニ於ケル多核白血球ガ澱粉ヲ攝取シテ次第ニ之ヲ消化シ去ルノ事實ヲ肯定シ、是レ白血球ガ澱粉粒ヲ組織内ノ異物トシテ攝取シ、自己ガ血清中ヨリ受ケタル糖化酵素ヲ利用シテ之ヲ消化シ去ルモノト考フベキモノナリトナシ、是ニヨリ多核白血球ガ糖化酵素ヲ産出ストナスハ當ヲ得タルモノニ非ズトナセリ。

(醫化學教室竹内抄)

○昇汞ヲ以テスル尿中尿素定量

法ニ就キテ

(福岡醫科大學雜誌第十卷第三號)

福岡醫科大學醫化學教室 向 井 元 透

著者ハ尿ニ昇汞食鹽溶液及醋酸曹達ノ適當量ヲ加フレバ尿酸、クサンチン鹽基、アンモニア鹽類及クレアチニン等ヲ殆ンド完全ニ沈澱セシメ得ルコトヲ實驗シ、次デ其濾液ニ二倍容量ノ四〇%苛性曹達液ヲ加フレバ、尿素ヲ定量的ニ沈澱セシムルモ、馬尿酸ノ如キハ溶液中ニ殘存スルコトヲ立證セリ。著者ハ此實驗ニ基キ昇汞ヲ用キテ尿中ニ於ケル尿素定量法ヲ案出セリ。其方法左ノ如シ。

一、昇汞二三・二瓦、鹽化ナトリウム一〇瓦 ( $\text{HgCl}_2 \cdot 2\text{NaCl}$  ナル複鹽ノ割合)ヲ蒸餾水五〇・五ニ溶解シ、次デ炭酸曹達液ヲ混ジテ微黃褐色ノ溷濁ヲ止ムルニ至ル。著者ハ假ニ之ヲ昇汞食鹽水ト名ケタリ。

二、醋酸曹達

三、約四〇%ノ苛性曹達水

四、硫化水素水(飽和)

實施、尿一〇〇・五ヲ五〇・五ノ「メッスコルペン」ニ注グ次デ三〇・一三二・五ノ醋酸曹達及一〇・五ノ昇汞食鹽水ヲ加へ、体温ニ煖メテ醋酸曹達ヲ溶解セシメ、水ヲ以テ五

○〇。蛙トナシ、約十時間後濾過シ、二五〇。蛙ノ濾液ニ倍量ノ四〇。〇%苛性曹達水ヲ加ヘテ尿素ヲ沈澱セシメ、次デ七〇。〇。蛙ノ水ヲ混ジ、上清ヲ濾過シ、殘渣ヲ再ビ前ノ如ク苛性曹達及水ニテ洗滌シ、更ニ八〇。〇%ノ酒精ヲ以テ兩三回洗滌スベシ。茲ニ於テ殘渣ヲ濾紙ト共ニ「ペッヘルグラス」ニ移シ、稀硫酸ニ溶解シ、硫化素水ヲ加ヘテ水銀ヲ沈澱セシメ、其濾液ニツキキエルダール氏法ニヨリ窒素量ヲ測定シ、之レニ二・一四三ナル係數ヲ乗ジテ尿素ニ換算ス。

著者ハ著者ノ新法ト從來行ハレタル Pfünger, Bleibrenn 及 Mörner-Sjogquist-Folin 氏等ノ法ニヨリテ得タル結果ヲ對照シ新法ノ簡單ニシテ満足ナル結果ヲ得ベキヲ説ケリ。

(醫化學教室竹内抄)

### ○「カムフル」ノ血管作用ニ就テ

(京都醫學雜誌第十四卷第三號)

ドクトル 山本直枝

著者ハ「カムフル」ノ血管作用ニ關シ、從來諸學者ノ行ヒタル動物試驗成績ノ極メテ雜多ナルコトヲ述ベ、此問題ヲ解決センガ爲メ、血管灌流試驗ヲ應用シ、家兔及白鼠ニ就キテ「カムフル」作用ノ實驗ヲ行ヒ其ノ結果ヲ述ベ、

更ニ之レガ理論的説明ヲ與ヘタリ。其要約ハ次ノ如シ。

血管ガ「カムフル」ニヨリテ被ル影響ハ極メテ多般ニシテ同一要約ノモトニ行ハレタル實驗ニ在リテモ、時ニ著シク相違セル反應ヲ呈スルコトアリ、要之「カムフル」ハ血管收縮及ビ血管擴張ノ兩種作用ヲ有シ、一ハ血管自己ニ對スル亢奮作用、他ハ血管擴張神經ニ對スル亢奮作用ナリ。然レモ血管自己ニ對スル亢奮作用ハ「カムフル」ノ濃度大ナル場合ニ於テハ早晚反テ血管筋ヲ疲勞セシメ或ハ麻痺セシム。而テ血管ガ「カムフル」ニヨリテ被ル影響極テ多般ナル事實ハ實驗材料及ビ實驗的要約ニ從ヒ相拮抗スル兩種作用量ノ間ニ於ケル權衡ノ變動ニ據ルモノナラント説キ、且ツ「カンフル」ノ心臟ニ對スル作用ハ血管ニ對スル作用ト類似ストナセリ。濃度大ナル「カムフル」ガ漸次血管筋ヲ麻痺或ハ疲勞ニ陥ラシメ、遂ニ大量ノ「アドレナリン」及「バリウム」ヲシテ毫モ其作用ヲ現ハサシメザルニ至ル事實ハ曾テ學者ノ證明セザリシ處ニシテ、其稀薄溶液ノ麻痺的影響ハ著明ナラズト雖モ、循環機障碍治療上看過スベカラザル現象ナルコトヲ力説セリ。

(本文十四頁附圖九葉) (醫化學教室內海抄)

○再ビ「モノアミノ酸」屬ノ「チアスターゼ」催進作用ニ就テ 附「味ノ素」ノ澱

粉消化作用ニ及ス影響ニ就テ

(日本消化機病學會雜誌第十六卷第二號)

臺南醫院 氏 原 均 一

片 平 重 次

著者ハ「グリココル」ガ動物性チアスターゼノ澱粉消化作用ヲ著シク催進セシムル事ヲ實驗シ、尙「アラニン」、「アスバラギン酸」、「グルタミン酸」等ノ「モノアミノ酸」屬ガ同様ニ「チアスターゼ」催進性ヲ共有スルコトヲ想定シタリ。(中外醫事新報八六一號)著者ハ先ヅ「味ノ素」中ノ「グルタミン酸」ヲ定量シテ、五八・八%ナル數ヲ得、次ニ「グリココル」、「アラニン」、合成シタル「グルタミン酸」並ニ「味ノ素」ガ「柏木チアスターゼ」、「アミノスターゼ」、「犬血清チアスターゼ」等ニ對シ如何ナル程度迄澱粉消化作用ニ影響スルカラ檢センガ爲一定量ノ比ニ於ケル酵素澱粉溶液ニ一定量ノ前記ノ「アミノ酸」ヲ加ヘテ、「チアスターゼ」ノ作用ヲ檢シタリ。其結果ニ依レバ「アミノ酸」ハ何レモ「チアスターゼ」ノ糖化作用ヲ著シク催進シ、其催進率ハ「アラニン」及「グリココル」ニ於テ最も強ク、「グルタミン酸」及「味ノ素」ハ前二者ニ比シ催進率

低ク恰モ其五四—六五%ニ該當スルヲ實驗セリ。

(醫化學教室片井抄)

○木内氏尿妊娠反應及胎兒性別

反應試驗ニ就テ

(東京醫事新誌第二〇一七號)

加 藤 時 也

著者ハ數例ニツキ木内氏尿診斷法ニ依リ妊娠反應並ニ胎兒性別反應ヲ行ヒ殆ド百發百中ノ成績ヲ得ベキヲ實驗シ次ノ箇條ニ就キテ注意ヲ與ヘタリ。即チ「バンプロール反應」試驗ヲ絕對的陰性ニ至ラシムル迄ニハ數回ノ濾過ヲ要スル事、「バンプロール」反應ハ最小量少クトモ二珽迄煮沸濃縮スル事、夜間ハ色調ヲ誤ルガ故ニ晝間行フベキ事、尙本試驗ハ妄リニ初心ノ助手ヲシテ行ハシムベカラザル事是ナリ。若シ叙上ノ條件ニ注意セハ其成績益々佳良ナリトナセリ。

抄者曰ク、著者ノ實驗成績ハ單ニ反應ノ陰陽ヲ云々シタルノミニシテ、何等確實ナル根據ノ存セザルノミナラズ、囊ニ當教室ヨリ發表シタル川原氏ノ業績ニ關シ何等辯明ヲ與ヘザルハ遺憾ナリ。(醫化學教室今井抄)

## 細菌學

## ○結核症ノ免疫原因ノ疑問ニ關スル補遺

(Zeitschr. f. Immunitätsforsch. Bd. 22, S. 225)

メタルニコフ

結核ニ對スル免疫性ハ其ノ高低ノ差ハアレバ、人類ニ於ケルガ如ク各動物ニモ亦存在ス。就中螟蛉ノ一種(蜜蜂ノ巢中ニ寄生スル一種ノ蛾ノ螟蛉ヲ指ス)及ビ他ノ昆蟲類ハ最高度ノ免疫性ヲ有ス。

結核ノ免疫性ハ臟器中ニ脂肪ヲ分解シ、結核菌ノ被膜ヲ溶解セシムル特殊酵素存在ノ消長ニ關係アルガ如シ而シテ此憶説ノ根源ハ次ノ事實ニ由來ス。

結核膿中ニハ脂肪ノミナラズ、結核菌ヨリ侵出シ得タル脂蠟ヲモ溶解セシムル「リバーゼ」ヲ含有ス、獨リ「リバーゼ」ヲ有スルノミナラズ、結核膿汁ハ結核菌体ヲ溶解セシムル性アリ。結核膿ノ「エキストラクト」ハ殺菌性及ビ溶菌性物質ヲ有シ、該物質ハ「リバーゼ」ノ如ク七十乃至七十二度ノ温熱ニ由リテ破潰セラル。

結核ニ傳染セシモノハ各臟器ニ於ケル溶脂作用ハ強度ニ減退スルコト人結核及試験的動物ニ於テモ同様ナリ、而シテ其ノ減退ノ度ハ疾患ノ輕重ニ一致ス。

結核患者ニシテ經過ノ良好ナルモノニアリテハ溶脂作用力ノ向上セルヲ認ム。依テ溶解作用力ヲ催進セシムル脂肪ヲ以テ榮養ヲトルハ結核症ニ對スル有効ナル方法タルヲ失ハズ。(細菌學教室清水抄)

## ○溶血性補体ニ就テ(第一回報告)

(日本微生物學會雜誌第五卷三月號)

醫學士 猪 木 正 雄

免疫學ハ近來細菌學ノ發達ト共ニ一大長足ノ進歩ヲナセリト雖モ補体ニ關スル研究業績ニ至リテハ、未ダ完璧ノ域ニ達セズ、不闡明ニシテ攻究スベキ点尠シトセズ。

著者ハ是等ノ不備ノ道ヲ開カントシテ本問題ノ研究ニ着手シ、遂ニ數多ノ新事實ヲ指摘シ且ツ疑問ノ一部ヲ闡明セシムルヲ得タリ。

一、エールリヒハ補体ハ單一ニシテ結合簇ト醜酵簇トノ二部ヨリ成レルヲ創説セルモ、ザックス及ビアルトマンハ補体ハ中節及ビ末節ノ二ヨリ成レルヲ謂ヒ、ヤコビ及ビリッツハ更ニ第三成分ノ存在スルヲ主張シ溶血性補体ノ構造未ダ一定スルノ域ニ到達セザリシモ著者ノ實驗ニヨレバ補体ハ中節(「グロブリン」層ニ在ルモノ)末節(「アルブミン」層ニ在ルモノ)及ビ第三成分ノ

三個成分ヨリナリ、其ノ協同ニヨリテ作用ヲ營爲スルモノナルコト明瞭トナレリ、然リ而シテ該三個成分ハ「モルモット」血清中ニハ殆ンド同量ニ含有セラレ過不及アルコトナシ、且ツ又溶血作用ヲ營爲スルニ必要トスル補体各成分ノ相互間ニ於ケル量の關係ハ未知ノ事ニ屬セシガ、末節最モ多ク中節最モ少ナク、第三成分其ノ中間ニ位スルヲ知ルニ至レリ。

一、溶血性補体ハ理化學的影響ヲ受ケテ其ノ機能障礙セラレ遂ニハ非働性トナルハ周知ノ事實ナレバ其ノ障礙ノ程度未ダ審カナラザルノミナラズ、其ノ理由ニ至リテハ何等研究スル所ナカリキ、從テ補体各成分ノ抵抗力ニ關シテハ全然暗黒裡ニ葬ラレ在リキ、著者ハ日光及ビ温熱並ニ無鹽性中間液等ニヨリテ溶血性補体ノ障礙セラル、程度其ノ原因、及ビ此等成分ノ抵抗力等ヲ審查セル結果次ノ事實ヲ知レリ。

(一)、「モルモット」血清ノ溶血性補体ハ日光ニヨリテ其作用著シク減弱シ、遂ニハ非働性トナルモノニシテ生理的食鹽水ニテ稀釋セル補体ハ稀釋セザル濃厚ナル補体ニ比シ毀損セラル、ノ度少ナシ、斯クノ如ク日光ニヨリテ「モルモット」補体ノ迅速ニ其作用ヲ失フハ補体各成分變化シ其ノ作用ヲ失フニ基因スルモ

ノニシテ、抗溶血性物質ノ發現セルガ爲メニアラズ、而シテ日光ニ對シテ最シ過敏ナル補体成分ハ中節ニシテ、末節之レニ次ギ、第三成分ハ抵抗力最モ強シ。

(二)、「モルモット」血清ノ溶血性補体ハ加熱ニヨリテ其ノ機能障礙セラル、是レ補体成分ノ破損スルニ基ツクモノナリトス、温熱ニ對シテハ末節最モ過敏ニシテ中節之レニ次ギ、第三成分ハ最モ強ク抵抗力、即チ末節ハ五十五度ノ温熱ヲ加フルコト十五分ニシテ破潰シ、中節ハ三十分ニシテ其作用減弱ス、而シテ第三成分ハ七十度ノ温熱ヲ三十分加フルニアラザレバ其作用ヲ失フニ至ラズ、一般ニ分離セル補体各成分ノ温熱ニ對スル抵抗力ハ其ノ中間液ノ種類ニヨリテ多少ノ差異ヲ生ズルモノナリ。即チ生理的食鹽水中ニ在リテハ加温ニヨリテ中節先ヅ破潰セラレ末節之レニ次ギ、蒸餾水中ニ浮游セシメテ加スル時ハ末節先ヅ減ビ、中節之レニ次ギテ破潰ス、蓋シ中節ハ食鹽水中ニテ容易ニ變性シ且ツ容血作用ヲ抑止シ、末節ハ蒸餾水ニ對シテ中節ヨリモ抵抗力少シク弱キ性質ヲ有スルニヨルナラム。第三成分ニ至リテハ中間液ノ食鹽水ナルト蒸餾水ナルトヲ問ハズ耐熱性ニシテ七十度ノ温熱ヲ三十分間加フルニアラザレバ其

作用ヲ失フニ至ラザルモノナリ。

(三)、「モルモット」血清ノ溶血性補体ハ蒸餾水ヲ以テ稀釋スル時ハ其ノ作用著シク減弱スルカ或ハ全ク非働性トナルモノニシテ其ノ原因一ニ第三成分ノ作用消滅スルニ在リ(蒸餾水中ニ在リテハ他ノ補体成分モ亦多少障碍セラル、モ第三成分ノ被害ハ及バザルコト遠ク就中、中節ノ被害最モ僅微ナリ)嘗テフェルラータハ溶血性補体ヲ中節及ビ末節ニ區別シ其ニ生理的食鹽水ニ保管スベキヲ推奨セルモ、ブランドハ中節ハ生理的食鹽水中ニテ速ニ其力ヲ失フヲ以テ蒸餾水ニテ稀釋スベキヲ主唱セリ、而シテ其ノ理由ニ至リテハ何等説明スルトコロナカリシガ彼等ノ所謂中節若シクハ末節ナルモノハ純粹ナルモノニアラズシテ、其ニ第三成分ヲ混有スル不純粹ノモノナリキ、故ニ蒸餾水中ニ浮游セシメタル補体成分ハ第三成分ヲ速カニ失ヒ、食鹽水中ニ浮游セシメタル中節ハ速カニ變性シ且ツ溶血作用ヲ抑制スルニ至ルモノナリ最モ理想的ニ且ツ比較的久シク補体各成分ヲ保存セントスルニハ補体ヲ三個成分ニ分離シ末節及ビ第三成分ヲ各食鹽水中ニ浮游セシメ、中節ハ蒸餾水中ニ保管スルヲ良トス。勿論末節ニ附屬スル第三成分ヲ

振盪ニヨリテ全部破潰シ得ザリシ時ハ其ノ末節ヲ寧ろ蒸餾水中ニ保管シ第三成分ノ全部ヲ破潰スルヲ得策トヤセム。(細菌學教室清水抄)

### ○結核ノ胎盤性遺傳ニ就テ(其一)

(日本微生物學會雜誌第五卷三月號)

ドクトル 石原泰一郎

結核ノ胎盤性遺傳ノ有無ハ結核ノ豫防撲滅上重大ナル意義ヲ有スル者ニシテ從テ、該問題ニ就テハ往時ヨリ已ニ屢々攻究セラレタル所ナレモ現今ニ至ル迄諸學者ノ研究報告ニ甚シキ相違ヲ見ル、サレバ之レニ向ツテ根本的解決ヲ與フルハ極メテ緊要ノ事ナリトス。

著者ハ妊娠「モルモット」三十頭及ビ妊娠家兎十五頭ニ就キ從來諸學者間ニ行ナハレタル結核菌移植試驗(皮下、靜脈、腹腔移植)ニ加フルニ著者ノ創意ニ由ル特殊移植試驗(試驗動物ヲ飢餓若シクハ過勞ニ陥ラシメタル場合、又ハ化膿菌トノ混合傳染並ニ「ベンツオール」ノ注入等ニヨル移植試驗)法ヲ試ミ、妊娠試驗動物ヨリ得タル總兒數百五十六(モルモット)兒七十八、家兎兒八十)ノ兒體並ニ「モルモット」ヨリ得タル胎盤四個ニ就キ検査セルニ其母動物ハ結核性病變アリシニ關セズ兒及ビ胎盤ニハ結核桿



菌ヲ一トシテ證明セズシテ悉ク陰性ニ終レリ。  
以上著者ノ動物試驗ニヨル實驗成績ハ千八百八十九年  
Sanchez Toledo 及ビ千九百七年 Cornet ノナセシ實驗及  
ビ其ノ說ニ一致シ、(Gärtner ノ陽性成績トハ全然相反ス  
ルモノナリ。(細菌學教室清水抄)

○「コレラ」特異培養地竝ニ「コレラ」

早期診斷ニ就テ

(衛生學傳染病學雜誌第十二卷第六號)

醫學士 丸 茂 猛

「コレラ」流行時ニ於テ可及的速ニ而モ確實ニ之ヲ診斷ス  
ルコトハ防疫上ノ第一義タリ從來最モ普通ニ行ハル、  
「アルカリ」性「ペプトン」水増菌法ヲ行ヒ寒天平板ニテ分  
離培養シ後凝集反應ヲ行フ法ハ時間ト經費ニ於テ不經濟  
ナレバ「コレラ」菌ノミヲ「エレクターフ」ニ發育セシメ他  
ノ腸内雜菌ノ發育ヲ阻止スル特異培養基ヲ考案スル人續  
出セリ就中チッドンネー氏牛血液「アルカリ」寒天、ピロ  
ン氏ノ豚血液曹達寒天、エッシェ氏ノ「ヘモグロビン」曹達  
寒天、押田氏ノ「アルカリ」性「ペプトン」寒天、壁島氏ノ  
「ヘモグロビン」曹達寒天等名アリ。  
然レドモ是等特異培養基ニアリテハ凝集價ノ低減アルヲ

マヌガレズ著者ハ昨年「コレラ」流行時ニ是等特異培養基  
ヲ比較研究シ且ツ稀釋液ヲ改セントシテ左ノ結論ヲ得タ  
リ。

(一)「コレラ」ノ早期診斷上本菌分離培養ノ目的ニハデッ  
ドンネー氏ノ「オリギナル」ヲ選ブベク而シテ之ニ可  
及的多量ノ檢査材料ヲ塗布スルヲ可トス(既ニ二十二  
時間ニシテソノ「コロニー」ヲ得)

(二)菌種決定ノ爲メ凝集反應ヲ行フ場合ニハ免疫血清  
(殊ニ高度ノ免疫血清ナキトキ)ノ稀釋ニハバンデー氏  
ノ「ペプトン」水ヲ以テスベシ。(細菌學教室白石抄)

○「コレラ」豫防接種後ノ免疫方試驗

(衛生學傳染病學雜誌第十二卷第六號)

醫學士 田 中正 通  
醫學士 五十嵐 玲

著者等ハ昨年「コレラ」流行時ニ東京市駒込病院内ノ看護  
婦洗濯婦消毒夫賄夫等ニテ略同一年齡竝ニ生活狀態ヲ有  
シ而モ男女殆ド同數ヲ選ビ總數五十一名ヲ三組ニ分チ。  
A 組ニハ傳染病研究所製加熱「ワクチン」(一立方仙迷ニ  
二密瓦菌量)ヲ第一回ニハ一立方仙迷、第二回ハ七日  
間ニ二立方仙迷ヲ皮下ニ注射セリ。

B組ニハ同ク傳染病研究所製加熱「ワクチン」(一立方仙迷ニ・五密瓦菌量)ヲ第一回ニハ〇・五立方仙迷、第二回ハ四日目ニ一・五立方仙迷、第三回ニハ七日目ニ二立方仙迷ヲ皮下注射ス。

C組ニハ北里研究所製感作「ワクチン」(一立方仙迷ニ二密瓦菌量)ヲ第一回ニハ一立方仙迷、第二回ニハ四日目ニ二立方仙迷ヲ皮下注射セリ。

而シテ最後ノ注射ヨリ十四日目及二十一日目ニ凝集價及豫防價(ブアイフェル氏現象ニ於テ「モルモット」ヲ保護スル血清量)ヲ精査シ尙ホ「コレラ保菌者及「コレラ」快復者ノ免疫力ヲモ檢シ次ノ如キ結論ヲ得タリ。

一、加熱ワクチン」ノ二回注射ニ於テハ豫防價十四日目ニハ最大價〇・〇〇一立方仙迷、最小ハ〇・一立方仙迷ナルニ比シ二十一日目ニハ最大價ハ同ジク〇・〇〇一立方仙迷ナルモ最小價ハ前者ニ比シ著ク高クシテ〇・〇四立方仙迷ナリ。

二、加熱ワクチン」ヲ三回注射セル場合ニハ十四日目ニ於テ最大豫防價〇・〇〇一立方仙迷、最小豫防價〇・〇五立方仙迷最モ普通ナルハ〇・〇一乃至〇・〇〇五立方仙迷ニシテ二回注射ニ比シ免疫力少ク高ルモ凝集價ニハ大差ナシ。

三、感作ワクチン」ヲ注射セル七人ノ内血清〇・一立方仙迷ニテ溶菌作用ヲ呈セザルモノ四名他ノ一名ハ〇・五立方仙迷ニテモ溶菌作用完全ナラザリキ。

四、「コレラ加熱ワクチン」(二密瓦ノ含菌液)注射後十四日目ニハ「コレラ」快復患者ニシテ固形便ニ復セシヨリ十四日目ノ血清ト同等以上ノ免疫鉢ヲ血清中ニ産出セシム。

五、「コレラ保菌者ノ十日前後ノ血清ノ免疫力ハ亦前述ノ接種者十四日目ノ血清ト大躰ニ於テ相同ジ。

六、「コレラ快復患者ノ血清中ノ抗鉢ノ量ハ症狀ノ重サト平行セズ重症ヲ經過スルモ必ズシモ多量ノ抗鉢ヲ生ゼズ。

七、菌量同一ナル時ノ免疫力ハ二回注射ハ一回注射ニ勝リ三回注射ハ二回注射ニ勝ルコレハ免疫學上ノ原理ト一致シ又「コレラ豫防接種ニ關スル統計ト一致ス。

八、「コレラ感作ワクチン」ハ加熱ワクチン」ニ比シ免疫力早ク發生スルノ事實ヲ認ムル能ハズ却テ加熱「ワクチン」ノ方早ク抗鉢ヲ生ズルカノ如キ感アリ。

(細菌學教室白石抄)

○小兒赤痢様患者ヨリ分離セル二種ノ

桿菌(「バラ赤痢、福岡A及ビB菌)

及ビ之等ニ依テ惹起サル、疾患（「バ  
ラ赤痢症」）ニ就テ

（細菌學雜誌第二百五十八號）

九州帝國大學醫科大學小兒科學教室

醫學士 箕 田 貢

著者ハ大正二年來小兒赤痢樣患者ノ大便中ヨリ二種ノ桿  
菌ヲ檢出シ該菌種ニ依テ發病セシ患者ノ症狀及ビ經過ト  
多數ノ小兒赤痢患者ニ就テ觀察セシ所トヲ對比考察シテ  
之レガ赤痢菌屬ニ近似セルモ一種特別ナル類屬ヲナス病  
原菌ナラント信ゼシガ症例少ク確的ナル斷定ヲ下スニ不  
充分ナリキ、然ルニ大正五年春以來殊ニ夏期ニ入りテ該  
菌種ニヨリテ發病セシ患者ノ十數例ニ接シ前ニ得タル數  
例トヲ合セテ二十一例ノ内四解剖例ヲ得、該兩菌ハ其菌  
ノ性質上、及ビ之レニ因テ發スル疾病ノ症候上、更ニ其  
病理解剖上赤痢菌屬ニ近似スレドモ一種特別ナル種屬ニ  
シテ固有運動ナク、瓦斯發生ナク、牛乳凝固ハ培養ノ二  
週乃至三週間以後也、又「ラクムス」葡萄酒液及「ラクム  
ス、マンニット」液中ニ於テハ二十四時間ニテ酸ヲ發生シ  
テ之ヲ赤變ス、「デキストリン、ラクムス」液及「ラクム  
ス、マルトローゼ」液ニ對スル作用ハ明カニ兩菌ニ相違ア  
リ、即チ一種ハ二十四時間ニテ之レヲ分解シテ酸ヲ發生

シ他ノ一種ハ數日乃至十數日後ニ之レヲ分解シテ酸ヲ發  
生ス而シテ一般ニ「マルトローゼ」ノ分解ハ「デキストリン」  
ノ分解ヲ初ムルヨリモ早シ、「ラクムス、サカローゼ」液  
及「ラクムス、ラクトローゼ」液ニ對スル作用ハ兩菌種トモ  
二三週間後ニ至リ分解シ初メテ酸ヲ産シ「マルトローゼ」及  
「デキストリン」ノ分解サル、ヨリモ數日遲シ、尙「サッカ  
ローゼ」ハ「ラクトローゼ」ヨリモ數日早ク分解サル、而シ  
テ兩菌種ハ傳染性ヲ有ス、斯ク兩菌種共ニ其生物學的性  
狀ハ以上ノ培養基中ニ於テ培養ノ數日乃至十數日間ハ赤  
痢菌屬樣ノ性狀ヲ呈スレトモ逐日分解シテ大腸菌屬樣ノ  
性狀ヲ顯シ來ル菌種也、尙該兩菌ハ發病後七八日目ノ患  
者血清ニヨリハ〇—一〇〇倍ノ稀釋度ニ於テ凝集反應陽  
性ナレドモ二週—三週前後ノ患者血清ハ三〇〇—五〇〇  
倍—千倍ノ稀釋度ニ於テ凝集反應陽性也。  
著者ハ上述ノ患者血清ニ對スル凝集反應及培養上ノ性質  
ヨリ結論シテ曰ク。

該菌ハ從來ノ赤痢菌屬トハ其性全ク異ナルガ故ニ「バラ  
赤痢菌屬ト命名セムト、而シテ兩菌種ノ内初メ赤痢第四  
型菌樣ノ性狀ヲ培養基ニ示シ後ニ之等培養基ノ總テヲ分  
解シテ酸ヲ生ジ恰モ大腸菌樣變化ヲ呈スル菌種ヲ「バ  
ラ赤痢福岡A菌ト稱シ、初メ赤痢第二型菌樣ノ性狀ヲ培

養基ニ示シ後ニ之等培養基ノ總テヲ分解シテ酸ヲ生ジ恰モ大腸菌様變化ヲ呈シ來ル菌種ヲ「バラ赤痢福岡B菌ト命名セリ、而シテ「バラ赤痢菌屬ニ依リテ發病スル所ノ急性傳染性疾患ヲ「バラ赤痢症ト稱シ臨床上ニハ混血膿粘液性便ヲ病理解剖上ニハ腸管ノ實扶的里性炎ヲ固有ナリトセリ。

(細菌學教室丹抄)

## 眼 科 學

○二重燒点ヲ有スル水晶体ニ就テ

(日本眼科學會雜誌廿一卷第三號)

醫學博士 河本重次郎

本症ニ就テハ未ダ日本ノ雜誌等ニ報告セル者ナキガ如シ著者ハ昨年十一月一例ヲ實驗セラレタリ、四十九歳ノ男子生來遠望透明ナリシニ、七ヶ月程前ヨリ何トナク視力減退ヲ來シ細字ハ接近セザレバ見ヘズ、殊ニ遠望ノ障害大ナリ、視力ハ裸眼ニテ右指數一米、 $\frac{20}{10}$  Dニテ $\frac{20}{100}$ 、左指數二米、 $\frac{20}{10}$  Dニテ $\frac{20}{100}$ ナリ、散瞳檢眼上水晶体核周縁部ニ稍薄黒ノ輪アリ核ノ境界著明ニシテ、徹照シツツ接近スルキハ、眼底ノ血管少シク不正ニ核ノ範圍内ニ現出シ、核ノ境界ニ沿ヒ彎走スルヲ見ル、又檢影法ニ依

テ屈折狀態ヲ見ルニ核部ト周圍皮質部ト屈折ヲ異ニシ、周圍部ハ正視格ヲ呈シ核部ハ近視格ヲ呈セリ、眼底ニ何等ノ變狀ナシ、此狀態ハ二重燒点アル水晶体ニシテ核性近視ト説明シ得ヘシ、而シテ其原因ニ就テハ、水晶体ハ年齡ノ長スルニ從ヒ其硬度漸々増進シ屈折率ハ増加ス、殊ニ核部ハ皮質部ヨリモ一層其變化甚シ、若シ其變化破格的ニ甚シキキハ、水晶体ノ中央部ヲ通スル光線ハ、他部ヨリモ多ク屈折ヲ蒙ラザル可ラズ、周圍ノ皮質部ヲ通スル光線ノ屈折狀態ハ、正視格或ハ遠視格ナルモ、中央部ハ近視タラザル可ラズ、ハルペン氏ノ檢査ニ依レバ、普通核部ノ屈折率ハ $\frac{1.43}{1.42}$ ナルニ、其病的硬化アル一例ニ於テハ $\frac{1.43}{1.43}$ ナルヲ見タリト、尙一考スヘキハ核部ノ境界面ノ彎曲増加ニ非ザルナキカ、ヘツス氏ノ說ニ依レバ未ダ確的ノ檢査ナク確定シ難シ然レモ核ノ屈折率増加ト核面ノ彎曲増加ト同時ニ存セズトモ言ヘズト説ケリ、

又デミセーリ氏ハ核ノ屈折率ノ増加ニ非ズ、周圍ノ皮質部ガ蛋白質ヲ失ヒ水分ヲ吸收シテ屈折率ヲ減シ、遠視格シタルニ由ル者トシ、此變化ヲ以テ白內障ノ初期ナルガ如ク曰ヘルモ誤説タリ、又スチリー氏ハ十六例中皮質部ノ遠視格ヲ呈セル者ヲ見サリシト云フ、而シテ核部ガ十

六D十八Dノ近視ヲ呈セル者、老年ニ至ルモ全白内障ヲ呈セズト云ヘリ、此核性近視ハ適當ノ眼鏡ヲ與フルモ、光線ノ屈折狀態不正ノ爲、十分視力ヲ得ズシテ水晶体ノ摘出ヲ要スルコトアリ、本症ハ瞳孔小ナルハ、核部ノ近視狀態ノミ現ハル、ヲ以テ、唯普通ノ近視ト誤認スルコトアリ、故ニ既往歴ニ依リ、普通ノ近視ニ非ラザルヲ察セバ散瞳検査ヲ要ス、又水晶体ノ圓錐形ノ片即チ「レンチコス」ノ時ニモ、水晶体ノ中央ニ當リ現限シタル一部近視格ヲ呈スルコトアリ、故ニ核性近視ヲ僞性圓錐水晶体ト云ヘル人アリ」。(眼科學教室加藤抄)

○「アルサミノール」注射後現發セ

ル眼疾患二例

(中央眼科醫報第八卷十第一號)

保利定直

和製「サルヅルサン」ノ治療的價值ハ歐製ノモノニ比シテ遜色ナシト稱セラル、然シソノ注射後ニ於テ已ニ眼科的疾患ヲ引き起セシコトハ伊藤、草間兩氏ニヨリテ報告セラレタリ、保利氏ノ實驗例ハ第一例ハ三十歳ノ男「アルサミノール」注射後二ヶ月ニシテ視神經網膜炎ヲ發シコトニ網膜出血著明ナリキ。第二例ハ二十五年ノ男同ジク

「アルサミノール」注射後二ヶ月ニシテ視神經炎ヲ發シ其狀恰モ鬱血乳頭ノ如キ觀アリキ。以上第一例ハ更ニ硝子体混濁ヲ續發セシガ其後再來セザリシ爲メ經過ヲ知ラズ第二例ハ沃度加里ノ内服及ビ青酸酸化汞ノ注射ニヨリテ漸次良快ニ向ヘタリト、抄者曰ク獨リ「アルサミノール」ノミナラズ歐製「サルヅルサン」注射後ニ於テモ眼科的障礙ノ來ルコトハ多クノ報告アリ即チ我邦ニ於テモ與村、今村、増田、北川、清水、鹿兒島ノ諸氏ニ因リ視神經網膜炎硝子体混濁、網膜出血、球外視神經炎網膜炎點狀角膜炎層炎ヲ發シ多クハ注射後ヨリ二ヶ月乃至數ヶ月ノ後ニ來ルモノ多數ナルコト報告セリ。(眼科學教室稻尾抄)

外科學

○バセドウ氏病甲状腺腫ノ組織學的變

化ト其臨床上所見トノ關係ニ就テ

(臨牀醫學第五年第二號—第三號)

醫學士 土井留之助

著者ハ近時バセドウ氏病甲状腺腫ノ三例(第一例 十九才女 十八才女(三重縣人)第三例(德島縣人)第二例 二十八才男(大阪府下人))ニ就キ臨床上ノ所見及手術ニ由リ剔出シタル右側甲状腺ノ組織學的所見ヲ詳述シ且ツハセ

ドウ氏病甲状腺腫ニ關スル諸家ノ見解ヲ明ニシ遂ニ一九一一年アルベルト、コッヘル氏ガバセドウ氏病ニ於ケル甲状腺腫ノ組織學的變化ト其臨床上所見トノ間ニ一定ノ關係ヲ有スルトノ所說ニ及ビ、更ニ著者ハバセドウ氏病症候ト植物性神經系統 vegetatives Nervensystem トノ關係ニ就テシヤルコー氏、クロード、ベルナール氏、メービユース氏、テオドール、コッヘル氏等ノ所論ヲ擧ゲテ如何ニバセドウ氏病症候ト甲状腺並ニ神經系統殊ニ植物性神經系統トノ間ニ密接ナル關係アルカラ窺ハシメ大要次ノ如クニ總括セリ。

眼球突出、メービユース氏症候、熱發、心悸亢進、新陳代謝機能亢進、糖尿、尿崩、食餌性糖尿等ハ交感神經系統ノ興奮状態ニシテ眼裂擴大、グレーフェ氏症候、涙液過多、發汗、呼吸障礙、胃液分泌過多、流涎等ハ自律神經系統ノ興奮状態ナリ。尙淋巴性素質、胸腺永存、「エオジン」嗜好細胞増加等後者ニ屬ス。

次ニ著者ハ其症例ニ於ケル臨床症狀ノ主ナルモノ、並ニ其甲状腺ニ見タル組織學的變化ノ大要ヲ表示(表略ス)シ第三例ニ見ルガ如ク臨床上殆ド總テ定型性症候ヲ有シ且經過長キ者ニ於テハ甲状腺ノ組織學的變化、不規則ナル圓鑄狀上皮細胞増殖ニ加フルニ多形性ナル細胞

核ノ變化ヲ以テシ、濾胞内容ノ液化乃至空胞ノ形成著ク、且細胞脱落劇甚ナリ。第一例及第二例ニ見ルガ如ク、經過割合ニ短ク、且發生緩徐ニシテ、諸症候モ亦輕度ナル者ニ在テハ、甲状腺ニ於テ、乳嘴狀突起増殖及肥大ノ程度第三例ニ比シテ著ク輕微ニシテ、濾胞内ノ膠樣物質ニ多少ノ側壁空胞形成ヲ鏡檢セルモ、大體ニ於テ甚シキ液化乃至消失ヲ見ズ、即知ルバセドウ氏病ノ經過、輕重等ハ全ク甲状腺ノ組織學的變化ト一致スルモノナルコトヲ。

更ニ進デバセドウ氏病ト神經系統トノ關係ヲ檢索スルニ「シンバチコトニー」及「ワゴトニー」ノ諸症候ヲ具備セル第三例ニ於テハ組織學上、不規則的多形性ノ細胞増殖、肥大ニ兼ヌルニ著キ細胞核ノ變化ヲ以テシ、濾胞内容ノ液化状態モ亦特ニ甚シカリキ。第一例ニ見ルガ如ク其症候殆ド總テ「ワゴトニー」ニ屬セルモノモ第二例ニ於ケルガ如ク「シンバチコトニー」症候ニ偏重セルモノモ共ニ濾胞内膠樣物質僅ニ液化シ、空胞形成輕度ナリキ、而シテ前者ニ於テハ細胞増殖著ク、多少不規則的ノ配列ヲ爲シ、細胞連結ノ弛緩ヲ示シ、且稍著明ニ脱落セル上皮細胞核ノ形態多様ナルニ反シ、後者ニ於テハ細胞肥大ノ可ナリ進行セルモノ在リテ、乳嘴

狀突起ノ形成著明ナルモ、増殖ノ程度第一例ニ比シ割合ニ輕微ナルヨリ推考スルニ、上皮細胞ノ肥大性變化著キ場合ハ臨床上「シンバチコトローベ」症候ノ主タルヲ示シ、上皮細胞増殖甚シク、細胞脱落顯著ニシテ、胞核變形ヲ伴フ場合ハ、臨床上「ワコトローベ」症候ノ重キヲ爲シ、凡テノ組織學的變化強度ニ現ハル、トキハ臨床上、兩神經系統ニ屬スル諸症候ノ著明ナルヲ見ル。

要スルニ著者ノ所見ハアルベルト、コッヘル氏ノ豫報セシ圓鑄狀上皮細胞増殖強度ニ營マル、場合ニ於テハ、エビンケル、ヘス氏等ノ唱フル「シンバチコトローベ」症候著ク、圓鑄狀上皮細胞増殖ニ兼ヌルニ、不規則的多形様ノ細胞増殖、胞核變形及細胞脱落ヲ示ス場合ハ「ワゴトローベ」症候著明ナリトノ說ニ略一致スルモノナリ。

尙ホ因ニ著者ノ第一例ニ觀ルガ如ク、其症候殆ド總テ「ワゴトニー」ニ屬スルハ稀有ノ場合ニシテ、エビンゲル、ヘス氏等ハ甲状腺分泌液ノ寧ロ自律神經系統ヲ侵害スルニ因テ起ルモノナリト爲シ、コストリビー氏ニ據レババセドウ氏病ニ於ケル元來ノ症狀ハ「シンバチコトニー」ニ屬シ「ワゴトニー」病候ハ寧ロ甲状腺内ニ

誘發サル、代價的機能ノ結果ナリト爲ス。

最後ニ著者ハ注意ヲ促シ第一例ニ於テ臨床上胸腺ノ存在ヲ、第三例ニ於テ組織學上強度ノ淋巴性病竈ヲ認メタル事實ニシテ胸腺肥大ガ永存ノバセドウ氏病ノ發生並ニ症候ニ大ナル意義ヲ有スルコトハ、近年諸學者ノ唱道スル所ニシテ、淋巴性素質亦然リトナス。カベルレ及バイエル氏等ニ據レバ胸腺モ亦甲状腺ト同ク、植物性神經系統ヲ侵害シ、後者ハ主トシテ交感神經系ニ、前者ハ重ニ自律神經系ニ影響スルモノナルガ如シ。尙第二例ノ如ク「ワクチン」注射後白血球減少症ヲ惹起セリトセンカ、病症經過ニ樂觀ヲ許サズ、其豫後ニ就キ少ナカラザル考慮ヲ要スベキモノト認メタリ。

### ○外傷ト血管縫合

(順天堂醫事研究會雜誌第五百三十一號)

醫學博士 佐藤清一郎

血管縫合術ハ近來異狀ノ發達ヲ告ゲ臓器移植「パラビオーゼ」ノ外、真正血管外科トシテ動脈瘤ニ於ケル血管縫合、外傷性血管ノ手術等屢々臨床的ニ行ハル、ニ至レリ然レドモ我邦ニアリテハ斯界ノ報告頗ル貧弱ニシテ僅カニ一二例ヲ知ルノミ、殊ニ外傷性血管離斷ノ場合ニ於ケ

ル血管縫合ニ至リテハ内外共ニ其例症最モ少シ。  
外傷性血管離斷ニ際シテ血管縫合ヲ行フニハ普通創面ノ汚染少キ時、創面ノ徒ラニ大ナラザル時、骨ノ大損傷ヲ伴ハザル時等ノ場合ニ於テノミ成功シウルモノナリ、著者ハ外傷性血管離斷ニ結節輪狀縫合ヲ行ヒテ良好ナル結果ヲ得タル二例ヲ報告セリ。

第一例 十八歳ノ職工調革ニ卷カレ右前膊内側腕關節ノ稍上方ニ於テ横行セル約四糎ノ不潔創ヲ得タリ創内筋肉腱損傷ノ外、橈骨動脈離斷セラレ出血多量、骨ニ異常ナシ仍テ創面ヲ消毒シ血管斷端ヲ發見シテ結節輪狀縫合ヲ施スニ直チニ末梢部ニ於テ脈膊ヲ感ジタリ次デ筋肉、腱ヲ縫合シ皮膚ヲ全部縫合シ第一期癒合ヲ營マシメタリ手術後經過佳良ニシテ一週日ノ後、抜糸シ一ヶ月後ニハ患者ハ勞働ニ従事シ脈膊ニハ何等障礙ヲ認メズ。

第二例 二十歳ノ裁縫學校生徒、或事故ニヨリ小刀ヲ以テ右側前膊上部内面ニ於テ縦行セル約二・五糎ノ刺傷ヲ受ケ出血甚大、創内橈骨動脈ハ完全ニ切斷セラレ骨ニ達セズ兩血管切斷端ヲ引寄せ結節輪狀縫合ヲ行ヒタリ此際末梢部ニ於テ明白ナル脈膊ヲ觸レ手指ハ著シク温暖ヲ感ゼリ手術後經過宜シク健側ト何等異ナル所ナシ。  
以上ノ二實驗例ニヨリ比較的小血管ニアリテハカール

氏法ニヨリ逐次血管輪狀縫合ヨリモ寧ロ結節血管縫合ノ方便ナルコトアリ又血管斷端ヲ一時鑷子ニテ挾ミオククナク四肢ニアリテハ助手ヲシテ中心部ヲ壓迫セシメ機ニ應ジテ緩メシムルハ殊ニ小血管ノ場合斷端發見ニ苦シム時ノ如キ甚ダ便利ナリ著者ハ之ニヨリ些ノ不便障礙ヲ認メザリキ而シテ橈骨動脈ノ如キ比較的小血管ニ輪狀縫合ヲ行フハ或ハ不必要ニアラザルヤノ感アランモ血管縫合術ハ創傷ノ理想的療法トシテ最モ推薦スベキモノタルハ論ナク且外科醫ノ務メテ行フベキ手術法ナリト。

(外科學教室高森抄)

### ○外傷性癩癩ニ筋膜移植術ヲ行ヘル例

(實驗醫報第三年第三十號)

醫學博士 森 武 美

外傷性癩癩ノ手術的療法ノ問題ハ腦表面ト其上在諸組織トノ陳舊ナル癒着ヲ除去シ且ツ新ニ發生スル癒着ヲ豫防スルニアリ而シテ從來硬腦膜缺損ノ補充トシテ用ヒラレタル物質ハ種々ニシテ「アロプラスチック」トシテハ金箔銀箔、「バラフィン」、魚ノ氣囊等、同種又ハ自家成形術トシテハ骨膜、腹膜(陰囊水腫ノ被膜、「ヘルニア囊等」)脂肪等ニシテ此等ハ一般ニ良好ナル成績ヲ舉グルコト少シ。  
キルシユネル氏ニヨリ企テラレタル遊離筋膜移植ニヨル



硬腦膜補充ハケヨルテ氏ニヨリ初メテ人体ニ試ミラレ爾來諸學者ニヨリ腦外傷、腦腫瘍、癩癩等ノ諸手術ニ應用セラレ一般ニ好結果ヲ得タリ、蓋シ筋膜ハ之ヲ得ルコト容易ニシテ其質強韌、腦膜ト組織上殆ンド同質ヲ有シ其缺損部ヲ密ニ閉鎖シ得テ短時間ニテ其邊緣良ク癒着シテ腦脊髄液ノ流出ヲ制止シ、外傷性腦脫ヲ防ギ且ツ化膿菌ノ頭蓋腔内侵入ヲ妨グル作用ヲ具備シ永ク其性ヲ保存スルタメ、タトヘ腦表面ト癒着ヲ起スモ恐ラク強固ナル癩痕トナルコトナク從フテ腦皮質ヲ著シク刺戟セザルベシ、故ニ硬腦膜補充トシテ他ノ組織ニ比スレバ一層優秀ナリ。著者ハ二十七歳ノ男子ニテ八年前々頭部ニ墜開外傷ヲ受ケケデ骨疽ヲ生ジ其摘出ニヨリ創面治癒セシモ終ニ外傷癩癩ヲ誘發シ一度某醫ニヨリ手術ヲ施サレ一時輕快セシモ暫時ニシテ再發セシ患者ニワグネル氏法ニ從ヒ皮膚瓣ヲ作り骨縁ト肥厚セル硬腦膜及硬腦膜ト腦ト癒着ヲ剝離シ硬腦膜ノ肥厚セル部ヲ切除セシニ直徑三仙米余ノ硬腦膜缺損部ヲ生ゼリ故ニ右大腿ヨリ約五仙米方形ノ廣筋膜ヲ切除シ其内面ヲ腦表面ニ向ハシメテ腦ヲ掩ヒ其周圍ヲ硬腦膜ニ縫合セリ而シテ手術後一兩日ハ數回ノ發作ヲ見タルノミニシテ已ニ九ヶ月ヲ經過セシモ未ダ再發ノ徵ナキ一例ヲ述ベ概括シテ曰ク本患者ハ癒着剝離ノ際腦表

面ニ一部損傷ヲ生ゼシヲ以テ恐ラク移植筋膜ハ腦面ト再ビ癒着ヲ來セルナルベシ然レドモ筋膜ハ硬腦膜ト其性質類似シ且ツ其性質ハ永ク保存セラル、ヲ以テ其癒着モ亦著シカラズシテ癩癩發作ヲ誘發スルニ至ラザルナランカ但シ永久治癒ハ數年ノ經過ヲ觀察セザルベカラズ本例ハ僅カニ九ヶ月ヲ經過セシノミナルヲ以テ之ニヨリ直チニ豫後ヲ斷定スルハ早計ニ失スト雖モ比較的良好ナル經過ヲトリツ、アルヲ疑ハズト。(外科學教室高森抄)

## 皮膚科學

○「サルワルサン」使用後ノ帶狀疱疹

及壞疽性帶狀疱疹

(Dermatol. Zeitschrift, Bd. XXI, S. 780.)

アルフレッド、エチンゲル

エチンゲル氏ハ「サルワルサン」注射後疱疹ヲ發生セルトニ就キ藤谷、渡邊氏、ベットマン、ミユルレル氏等十數人ノ例症及意見ヲ掲ゲテ後自家實驗ノ一例トシテ三又神經第一枝下ニ發生セル帶狀疱疹ヲ報告セリ。

患者ハ五十一歳ノ女ニシテ家族健、麻疹ノ外結婚迄殆ド健、舉子三人内二人ハ猩紅熱ニテ死亡入婚シ夫ヨリ微毒

ヲ感染セルモノナリ一九二二年一月ヨリ頭痛及神經質トナリ一月ヨリ四月迄水銀劑注射九回、九月突然頭痛發作ワツセルマン氏反應陽性「サルワルサン」注射一回其後何等異常無シ一九一四年一月再ビ頭痛ヲ來シ同八日「サルワルサン」注射一回九、十日水銀塗療療法ヲ行フ、然ルニ九日顔面ニ集簇セル發疹ヲ出現シ水疱ヲナス、灼痛左偏頭痛アリ現症トシテハ榮養中等内臟ニ變化ナシ脈膊速ニシテ小、体温高シ應答難澁上下眼瞼額頰部ハ一般ニ浮腫シ左上下眼瞼ヨリ左側鼻部及頭部ニ達セル壞疽アリ又左右上肢ニ對側性ニ及左乳房部ニモ水疱疹アリ尿中糖蛋白ナシ、左眼結膜浮腫眼運動滑ナラズ眼底尋常眼瞼下垂セリ左側三叉神經第一枝ハ知覺鈍麻第二、三枝ハ右側ト同ジク異常無シ。

終リニ次ノ件ヲ附言セリ。

一、疱疹ハ「サルバルサン」注射ノ副作用トシテ、發生シ得。

二、注射直後或ハ又或ル間隔ヲ經テ發生ス。

三、注射毎ニ新タニ發生シ又新タニ異ナル部位ニモ發生ス。

四、分量ニ關セズ。

五、「サルワルサン」使用法上ニハ何等關係無シ。

六、全身何レヘモ發生シ得。(皮膚科教室森田抄)

○「ネオサルワルサン」注射ニヨリ

テ起リシ出血性腦炎ノ一例

(Dermatol. Zeitschrift, Bd. XXI, S. 787.)

ラ ヲ シ ヌ

患者ハ二十歳ノ女ニシテ一九二二年微毒ニ罹リ五十日間塗療療法ヲ行ヒ翌年更ニ五十日餘ノ塗療療法ヲナセシガ高度ノ口内炎ヲ起シ入院治療ヲ乞フニ至ル。

患者稍羸瘦、輕度ノ「スコリオーズ」ヲ有スルモ肺ニ異常ナシ微毒ノ徵候トシテハ項部ニ輕度ノ白斑ヲ視ルノミワツセルマン氏反應弱陽性、尿中糖分蛋白ヲ有セズ、体温重五〇・三〇〇、脊髓液ワツセルマン氏反應陰性、一月八日口内炎ハ治ス。

一月廿三日「ネオサルワルサン」〇・六瓦第一回靜脈内注射ヲ行ヒタルモ副症更ニ無シ一月三十日「オオサルワルサン」〇・七五瓦第二回注射ヲ行ヒ後輕度ノ發熱(卅八度内外)及頭痛有リ二月一日發熱卅八度七分二月二日嘔吐ヲ來シ夕方ヨリ意識消失セリ同三日嘔吐意識消失且不安狀態ニシテ返答不能排尿及便通罷ム瞳孔ハ散大鬱血乳頭ヲ見ル体温卅八度六分、依テ食鹽水一〇〇〇瓦「アドレナ

リン」一晁注射及「カンフル」一筒注射腰椎穿刺ニヨリテ  
初メ清澄ノ液ナリシガ後血様液ヲ出スワッセルマン氏反  
應陰性ナリ。

二月四日朝躰温卅八度五分晚卅八度六分脈膊八〇、六四、  
五八、六二、六八、意識消失軽度ノ痙攣顔面不全麻痺瞳孔  
多少散大檢眼上前日ニ同ジ右側手足ノ不全麻痺及バビ  
ンスキ症狀ヲ現ハス食鹽水一〇〇〇瓦「カンフル」油及「カ  
フェイン」注射牛乳四分ノ三「リータ」飲用夜間不眠。

二月五日朝躰温卅七度七分晚卅八度脈膊五六右側手足ノ  
麻痺ハ治ス食鹽水一〇〇〇瓦。

二月六日朝躰温卅八度三分晚卅八度八分意識常ニ消失ノ  
狀ニアリ二月七日朝躰温卅八度四分晚卅七度六分脈數六  
四右口角下垂、鼻唇溝消失而シ間ニ明答シ牛乳若干飲用  
シ得、食鹽水注入一〇〇〇瓦二月八日全ク佳良ノ状態ヲ  
示シ間ニ對シテハ坐居ニ於テ明答シ得タリ然ルニ午後四  
時ニ至リ突然虚脱ニ陥リ死亡セリ。

翌日病解及顯微鏡の検査ノ結果右肺上葉ニ粟粒大ノ出血  
栓塞アリ腦ニ於テハ側室ノ天蓋及基底後方ニ粟粒大小溢  
血ノ群簇シテ胡桃大ヲナス其他甲状腺胸腺、心臟、肝、脾、  
腎臟等ニハ鬱血ノ外著明ナル所見ナシ腦溢血ノ部分ニハ  
「スピロヘーテ」ヲ發見セズ髓鞘ニモ變化ナシ。

斯ク病解上「サルワルサン」障礙ノ定型的ノ像ヲ現ハセリ  
他ノ「サルワルサン」死ノ報告ノ如ク此ノ例ニ於テモ何等  
技術上ノ缺陷無ク且注射量ノ過剰ニモ非ラズ恐ラクハ患  
者ノ特異質ニ因ルナルベシ或ハ又輕症癡呆ノ患者ニ注射  
セシ爲メナルカ予ハ元來本症ヲ「サルワルサン」禁忌症ノ  
一ニ算シ居レリ然ルニ丁度死前二日看護婦ノ言ニ據リ始  
メテ患者ガ本症ヲ有スルヲ知ルヲ得タリ。

(皮膚科教室森田抄)

### ○濕疹ノ熱浴療法

(Dermatologische Wochenschrift, 1914, Nr. 35.)

ケーザル、ヒイリップ

著者ハ多數ノ職業的ノ手掌濕疹ニ就テ左ノ治療法ヲ試タル  
ニ好結果ヲ得タリ即チ濕疹ガ急性慢性ソレガ濕潤セルト  
乾燥セルトニ關セズ皆同一方法ニヨリテ治療シ朝夕二回  
三十分間手ヲ熱キ石鹼浴(石鹼ハ化粧石鹼ノ緩和ノモノ)  
ヲトラシメ後充分濕氣ヲ清拭乾燥シ複方レゾルチン軟膏  
(「レゾルチン」)「イヒチオール」各五〇「ザリチル酸二〇  
黄色ワゼリン」一〇〇)ヲ患部ニ塗擦シ厚ク綿ヲ重ネ而シ  
テ綑帶ス患者若シ手ノ使用ヲ欲スル場合ハ軟膏ノミヲ塗  
擦シ手袋ヲ使用ス、カクスル事四乃至八日間ニシテ患部  
清潔トナリ癢痒消失ス、尙ホ八日間ハ夕ノミ十五分間程

熱浴ヲトラシメ亞鉛華バスタ」又ハ亞鉛華軟膏ヲ塗擦ス  
若シ再發ノ恐アラバ同様ノ方法ヲ繰返スベク、本療法ノ  
有効ナル点ハ癢痒ノ容易ニ消失スル事、治癒ノ早キ事及  
ビ健康皮膚ヲ侵ササルニアリ。(皮膚科教室布施抄)

○「バリヂン」反應ノ臨床的價値

ニ對スル疑問補遺

(Dermatologische Wochenschrift, 1914, Nr. 35.)

レードネル

「スピロヘーテ」ガ發見セラレシ以來多數ノ學者ハ結核症  
ニ於ケルピルケ氏反應ノ如ク黴毒ニ特有ナル皮膚反應ヲ  
發見スベク努力セリ、然ルニ最近クラウスネル及フイン  
イル兩氏ハ「バリヂン」(白色肺炎Pneumonia alba ニテ死  
セル小兒ノ「スピロヘーテ」ヲ多量ニ有スル肺ノ越幾斯ニ  
○五%ノ「フェノール」ヲ含有セルモノ)ナルモノヲ公ニ  
セリ之レハ第三期黴毒及遺傳黴毒ニハ特有ノ反應アリト  
稱ヒ千五百名ノ例ニ就テ實驗セル結果診斷的價値アルモ  
ノトシ○〇二一〇〇四ccヲ先ヅ皮膚ニ注射セルニ二十四  
時ニシテ注射部位ニ輕度ノ褐色ニ「マーク」大ノ丘疹周圍  
ニ約一仙迷突赤色炎症性ノ暈ヲ繞ラシ次ノ十二乃至二十  
四時間ニハ五「マーク」大トナリ尙食鹽水ヲ以テ對照スル  
ニ二十四時間ニシテ輕度ニ翌二十四時間ニハ消失スル紅

斑ヲ現ラハスノミト且本反應ハワッセルマン氏反應ニ優  
ルモノト主張スル處アリシガ著者ハ多數學者及實地家ノ  
試驗ヲ參考トシ尙自家經驗ニヨリ第三期黴毒ノ八例ニ就  
テワッセルマン氏反應ガ陽性ヲ示セルニ拘ハラズ全ク陰  
性ニ終リタル例等ヨリシテ全ク「バリヂン」ガ臨床的ニ價  
値ヲ有セザルモノト結論セリ。(皮膚科教室布施抄)

○人ノ顔面分泌物中ノ細菌ニ就テ

(皮膚科及泌尿器科雜誌第十七卷第二號)

醫學士 坂 口 勇

著者ハ面皰瘡瘡ヲ有セザル内外百二十人ノ顔面殊ニ鼻尖  
鼻翼ノ分泌物ヲ檢索シ如何ナル種類ノ細菌如何ナル百分  
率ニ存在スルヤ年齡其他ノ關係ニヨリ差異アリヤ否ヤヲ  
研究セリ其ノ結果ニ依レバ小兒ニアリテハ一般多數ノ  
「フラツシエンバチルス」ヲ見瘡瘡菌ハ缺如シ又ハ例外ト  
シテ存在スルノミ思春期ヨリハ普通無數ノ瘡瘡菌ヲ見  
「フラツシエンバチルス」ハ少數トナリ又ハ缺如スル事サヘ  
アリ此事實ハ各國民各人種同様ナリ瘡瘡菌ハグラム陽性  
ニシテ非抗酸性短太ノ桿菌ナリ分泌物中ニ不規則ナル群  
集ヲナシ存ス長サ一乃至一二幅三分一乃至二分一「ミク  
ロン」ナリ往々長ク縦ニ列スルコトアリ又粘液膜著明ナ

ルコトアリ種々ノ形態ヲ有スル「フラッシュエンバチルス」中著者ハ二回黴絲及ビ其一回ニハ「スプロッスング」ニヨリ固有ノ「フラッシュエンバチルス」ノ成立ヲ見タリ此黴絲トノ關係及「スプロッスング」ヲ見ルノ事實ニヨリ「フラッシュエンバチルス」ハ桿菌ニアラズ「ビルツ」ニ屬スベキモノナルヲ知レリ面胞中ニアリテモ顔面正常分泌物中ニアリテモ固有ナル瘰癧菌ノ間ニ介在シテ往々遙ニ長ク色素ニ弱ク染色スルグラム陰性ノ桿菌ヲ有ス是ハ恐ラク分泌物又ハ面胞ヲ培養スルニ當リ各培養基ヘ好氣性ニモ嫌氣性ニモ繁殖スル桿菌ト同一ナルベシ、著者ハ尙ホ二回四乃至八「ミクロン」稀ニ尙ホ長キ桿菌狀ノ「ビルツ」ヲ見タリ其兩尖端ハ槍ノ如シ「フラッシュエンバチルス」トハ何等發生的的關係ヲ有セズ。(皮膚科教室布施抄)

## 婦人科及産科學

### ○卵巢妊娠

(Zeitschr. für Geburtsh. u. Gynäk. Bd. LXXVIII Hft. 1.)

Rud Th. Jaschke.

二十五歳ノ經産婦、左側喇叭管妊娠ノ診斷ノ下ニ開腹術ヲ行ヒシニ左側卵巢妊娠ナリキ、剔出臓器及組織の標本

検査ノ結果モ亦卵巢妊娠ナル事ヲ確證セリ、一二〇仙米ヲ有スル胎兒ヲ其ノ内ニ保有セリ。(婦人科教室波々伯部抄)

### ○門靜脈枝結紮ニヨル實驗的

#### 子疝様症狀

(Zeitschr. für Geburtsh. u. Gynäk. Bd. LXXVIII Hft. 1.)

Albert Dahmann.

著者ハ家兎ニ就キ其ノ門脈枝ヲ結紮スル事ニヨリテ該動物ガ子疝様發作ヲ發現シ同肝臟ニ一定ノ變化ヲ來ス事ヲ實驗シテ曰ク、人ノ子疝ニアリテモ、増大セル妊娠子宮ハ門脈ノ根部及ビ肝門部ノ血管ヲ壓迫シ、タメニ肝臟ノ變化ヲ起シ、痙攣ヲ來スモノナラント。(婦人科教室波々伯部抄)

### ○内生殖器發育不全ニヨル子宮鼠蹊

#### 「ヘルニヤ」ニ就テ

(Zentralblatt für Gynäkologie, 1916, Nr. 8.)

Dr. Kurt Werner Eumike.

子宮鼠蹊「ヘルニヤ」ノ一例ヲ報告セリ、從來ノ記載ニヨレバ子宮ノ鼠蹊「ヘルニヤ」ハ卵巢及ビ輸卵管ノモノヨリモ遙ニ稀ナリ。

二十一歳ノ處女、四週日毎ニ反復スル増進性左下腹部牽引痛ノタメニ醫治ヲ乞フ、從來月經ヲ知ラズ。

体格中等、榮養佳良、乳房ノ發育尋常、腹部左側鼠蹊部ニ還納容易ナル鶏卵大ノ「ヘルニヤ」アリ。外陰部發育普通、陰ハ盲孔ニ終リテ子宮腔部ヲ觸レズ。麻醉ノ下ニ直腸診察ヲ行ヒ、子宮鼠蹊「ヘルニヤ」ノ疑ノ下ニ手術ヲ行フ、同時ニ内生殖器ヲ全部剔出セリ。「ヘルニヤ」内容ハ子宮及ビ左側卵巢ナリキ。

手術後患者ノ經過良好、爾後症狀全快セリ。内生殖器ノ所見。子宮ハ略ボ普通ノ形狀ニシテ大サ甚シク小且ツ柔軟(最廣部分二〇仙米、厚、一・七五仙米、長、三〇仙米)反ツテ同伴セル左側卵巢ノ方遙ニ大ナリ(長、六〇仙米、二・七五仙米、厚、一・五仙米腎臟形ヲナス、之レヲ鏡見スルニ多數ノ小黄体嚢腫ヲ形成シ所々ニ僅ノグラ―フ氏胞ヲ見ル)同側輸卵管ハ細キ柔軟ナル巢狀トシテ存シ、右側卵巢ハ欠除シ、痕跡ノ喇叭管ヲ子宮右端ニ認ム、子宮頸部ハ只廣韌帶ノ一部肥厚セルノミニシテ閉鎖セル腔端ノ上方ニ終レリ、右圓韌帶ハ痕跡様ノ細線トシテ辛フジテ認め得ルニ過ギズ。著者ハ右「ヘルニヤ」ノ發生的原因ヲ次ノ如ク説明セリ、普通「ヘルニヤ」發生ノ要約ヲ必要トスル事勿論ナレモ子宮ノ發育不全モ亦重大要件ナリ、其ノ左側ニ出現セルハ左側附屬器ノ大サ右側ニ比シテ甚シク大ナルト左側圓韌帶ノ(兩側共甚シク

發育不良ナレ共)比較的著シク強大ナリシガ故ナルベシ。

(婦人科教室波々伯部抄)

### ○先天性初生兒鞏硬浮腫症ノ一例

(日本婦人科學會雜誌第一二卷第四號)

藤村元張  
谷本道

初生兒鞏硬浮腫症ニ就キ略説セル後著者ノ遭遇セル一例ヲ報告セリ。即チ妊娠(羊膜水腫)及ビ脚氣ト診斷セラレタル三十八歳ノ經産婦ヨリ八ヶ月ニシテ娩出セル初生兒ニシテ生後五十分間尙心音ヲ聽取シ其ノ間反復人工呼吸法ヲ試行セシニ係ラズ、全ク無呼吸ノマ、鬼籍ニ入レリ。高度ノ鞏硬性浮腫ヲ有ス、殊ニ顔面ニ著明ナリ。剖檢上次ノ如キ變化ヲ呈ス。

一、聲門水腫、二、空洞及ビ皮膚ノ水腫、三、肺胸膜及ビ心内板等ノ出血、四、脾及ビ肝臟鬱血、五、右心室擴張及ビ肥厚。

著者ガ該材料ヨリ諸内臟ノ組織學的檢策並ニ血液検査ヲ完成セザリシハ遺憾ナレモ本症ハ蓋シ先天性初生兒鞏硬浮腫症ト診斷スベキモノナラント結論セリ。其ノ特ニ顔面ニ高度ナリシト先天性ナリシ事トハ臨床上興味深シ。

(婦人科教室波々伯部)

# 漫 錄

## ○印度見聞記 (其二)

川久保俊一 (大正四年)

醫事管見。

印度ニ於ケル醫者ニ舊式(我が國ノ漢方醫ノ如キモノ)ナルモノト新式(西洋醫)ナルモノトアル、新式ナルモノニ三通ノ醫者社會ガアル即チ外國人醫師、「パーシー」人醫師及土人醫師ガアル、外國醫師ハ多クハ英國人ヲ其ノ位置ガ最上ニアリ醫界ノ中樞チナシテナル、個人テ開業シテナル人ガアルガ多クハ外國人ノミチ診斷スル、本國テ醫師トナリ印度ニ渡ツテキタモノガ多イ、「パーシー」ノ醫師ハ良醫多ク、醫術ニ長シ社會的位置ハ英國人ノ次ニアル、土人ノ患者チ多ク見ル英、獨テ醫師トナツタモノガ多イ、土人間ノ信用ハ寧ロ英國人以上デアアル、土人ノ醫師ハ土人ノミチ診斷スルモノテ醫界ノ最下級ノモノデアアル、多クハ印度ノ醫學校ヲ卒業シタモノデアアル印度ニハ孟買、マドラス、ラホール及ビカルカッタ醫科大學ノ外全國ニ二十二ノ醫學校ガアル、今ヤ歐式醫術國中ニ歡迎スル所トナリ市、町、村衛生醫、土人軍軍附醫官、公立病院助手、檢疫醫等皆醫學校卒業生ノミトナリ又各地開業醫甚ダ多クナリ草根木皮醫師ノ勢力ハ次第ニ減ズル様デアアル、日本人ノ醫師ニ今迄ハ英國政府ニテハ印度ニチイテ開業ヲ許サナカツタ即チ日本ノ醫術ヲ認メナシテアル、然シソレハ當然ノ事デ、目下印度ニチイテ日本醫師ト自稱スルモノガ法律ノ網ヲコケリ開業シテナル、甚ダウタガラシキモノデ、良イ方テ開業前期試験ヲ通過シタモノ、中ニハ醫

者ノ藥局生チシテイタ位ナモノガ醫師デゴザルト立派ナ門戶チカマヘテ活動チシテナル、シカモ忍耐強ク永ク居ルモノハ漸々成功シツ、アル現ニ孟買テ齒科醫ナル人ガ内外科ヲ以テ開業シ數万「ルビ」ノ富チナシテ居ルモノガアル昨年十一月英國政府ハ遂ニ印度ニチイテ日本醫師ヲ認メ大學卒業生ハ勿論各專門學校卒業生ト雖トモ開業スルコトガ出來ル様ニナツタカラ之レヨリ日本醫師ノ名聲ガ全印度ニ響キ渡ル事デアロウ、勿論、日本醫師ハ土人チ相手ニスルノデアルカラ「パーシー」醫師ト競争スルコトニナル一時ハ多少ノ困難モアルガ遂ニハ必ズ成功スルモノト思フノデアアル。

印度ニハ色々ノ藥品原料及ビ染料ガ出ル、主ナルモノハ阿片、規奈樹皮、「センナ」樹皮、染料トシテハ「インザゴ」藍及ビ「ミラボラム」澱木皮、藥用染料ヲ兼ネタルモノニ姜黄ガアル。

阿片ハ中央印度クワリア、ホパール、ウダイプール、インドール及ビベハール地方ニノミ耕作ヲ許可シ收穫セル粗製阿片ハゴトゴトク政府ノ収稅署ニ納付シ一定價格ノ交付ヲ受クル方法ヲトツテナル。

規奈樹皮ハマドラス州ノミニチイテ栽培セラレ總產出額ノ半額ハ政府ノ事業ニ係リ規奈ヲ製造シ原價ヲ以テ各郵便局チシテ食民ニ拂下ゲセシメ印度通有ノ「マリリア」患者ヲ救済スル慈善事業ノ一端トシツ、アリ、同州ニ三大樹園ガアツテ盛ニ栽培チシテ然シ現時瓜哇產ノ方ガ廉價ノタメ不振ノ有様デアアル。

「センナ」樹皮ハ南部マドラス州ニ産シ葉ノ大小ニヨリ三通ニ區別サレテ多クハ英國ニ輸出サレテナル。

「インザゴ」藍ニハ二種アツテ一種ハ印度固有ノ産マドラス、ベンゴールニ多ク出來ル、他ノモノハ瓜哇カラ移入シタモノデアハール、パトナ及ビガヤ地方ニ多ク出ス然シ現今化學工業ノ發達ノタメ人工製造ニ成功シ著シク「インザゴ」藍ノ用途チ減縮シタトノ事デアアル。

「ミラボラム」澁木皮及姜黃ハ産額ハ少イ英國及米國ニ多ク輸出サレルソツテアル。

日本カラハ主ニ樟腦ガ輸入サレル、全輸入ノ九割ニ割ハ英國、年ニ約百二十五萬圓許ノ額ニノボツテナル、コレハ藥用ニ用フルコトハ少ク多クハ「ヒンドユ」教徒ノ祭日及火葬ノ際炎燒スルニ用ヒルノテアル英國政府ハ

印度ニ「コカイン」ノ輸入ヲ嚴禁シテナル、從ツテ「コカイン」ノ價ハ非常ニ高ク内地ノ約十倍デアアル故ニ時々日本船員ガ密輸入ヲシテ大ナル罰金ニ處セラルル事ガアル。

英國ノ印度政策。

印度ニ於ケル英國ノ政治ハカノ東印度會社ノ「クライブ」ヘステイングス」以來甚ダシイ虐政モ行ツタ、現ニ今テモ我々外國人ヨリ見テウタタ亡國ノ民ノ勝利者ニ對スル盲從ニ深キ同情ノ念ヲ起サシムルコトガアル例ヘバ瀛車ヤ電車中ニ於テ先取權ヲ有セル印度人ノ座席ヲ奪取スルガ如キ或ハ印度人ヨリトリタル租稅ヲ以テ英國人ノ市街ヲ自由ニ修理シ土人ノ市街ヲ願ミザルガ如キ又公園ナドモアル場所ハ「土人不可入」ト云フ標札ヲタテ土人ノ出入ヲ嚴禁セル如キ其ノ制限ト壓迫トハ見ルモ氣ノ毒ナ位デアアル、印度人デモ智識階級ノ人ハ英國ノ施政ノアマリニ壓迫的ナルニ不滿チイダキ盛ンニ暗殺ナドガ行ハレタ、近年英國政府モソノ点ニ氣ガツキ稍緩和ナル手段ヲ取り、印度人ノ一部ニ參政權ヲ與ヘタガ然シ印度人ノ議員ガ少數デ多クハ官選ノ英國人デ印度人ノ主張ハ少シモ通過シナイトノコトデアアル、然レドモ大体ヨリ云ヘバ英國ノ印度政策ハカナリ成功シテナルト思フ、英國ナレバコソ今日迄能クヤリ通シテ來タノデ今日ノ印度ノ發達ハタシカニ英國ソノモノノ賜デアアル、印度ハ宗教ノ人種デアアル、甚ダシキ保守主義ノ國民デアアル英國ガ宗教ノ自由ヲ許シ風俗、習慣ニ干渉セズ印度人自身ノ狀態ニ放任シタ點ハタシカニ英國人ノエライトコロデ又今日ノ大成功ヲ見タ一大

原因デアアル然シ一面ヨリハ益々迷信ヲ深クシ墮落ヲ促シタト云フ事實ハ見逃スコトガ出來ヌ英國政府ガ常ニ自國ノ利益勢力ノ擴張ニノミカチ用イ衛生設備ノ不行屆、教育機關ノ不完全チキタセルハ英國政府ノ政策トシテハ意外ニ感ズル所デアアル。

印度人ノ親日思想。

印度ハ何シロ吠咤、優波尼沙土ノ經典チ有スル國デアアル、實ニ宗教哲學ノ淵藪デアアル、現代ノ文明諸國ハ皆直接間接ニ其ノ思想上ノ影響ヲ受ケテナル、殊ニ日本支那ノ如キハ其ノ影響ヲ受ケルコトガ多イ、今ヤ印度ハ英國支配ノ下ニ呻吟シテナルガ一部上流ノ智識階級ノ間ニハ猶此古來相傳ヘタル高遠ノ思想ガ貯ヘラレテナル、日本デハ此ノ高遠ノ思想ハ國民ノ實際生活ニ結びツイテ其ノ向上心ヲ進メテナルガ印度デハ現實世界トアマリ掛ケ離レテ居ルノテソレガ却ツテ首架トナツテ、モガキ惱ンデナル、斯ケテ印度ニハ英國ノ征服以來絶ヘズ反亂ガ起ツタ、革命ガアツタノデアアル然シ常ニ統一チカキタルタメ不成功ニ陥リ自滅シタノデアアル故ニ東洋人ハ決シテ西洋人ニ勝ツコトハ出來ヌト思ツタ然ルニ今ヨリ二十一年前「アビシニア」人が伊太利人ニ勝ツニ及ビ東洋人モ西洋人ニ劣ラヌ人種デアアルト云フ自覺チモツ様ニナツタ更ニ千九百五年ノ日露戰爭ニ日本ガ必ズ敗ナルト豫期シテイタノガ却ツテ大勝チキタタルコトニヨリ益々ソノ自覺チカタクシタノデアアル、彼等ノ先入的ニ腦裡ニキザマレタ歴史的ノ革命モ、アル方法手段ト時チ得タラバ必ズ成功ガ出來ルコトヲ知ツタ、ソレニハドウシテモヨイ指導者ガナケレバナラヌ又マトマリガツカヌ、ソレニハ日本ニ依リ日本ノ指導ヲ受ケテ目的チハタス外、道ガナイト思ヒ日本ニタヨレバ必ズ英國ノ壓迫チノガルルコトガ出來ルト考ヘ有形的ニモ無形的ニモ日本ニ對シ好意チ有シ親日思想ガカレラノ腦ニキザマレタノデアアル、從ツテ日本人ノ社會的位置ハ甚ダ上流デ又人氣モ良好デ土人等ノ歡迎サル、所トナツテ



ナル、然シ日本ヲ慕フニイタツタ事ハ即チ英國ニ反抗スルノ意味テ印度近  
來ノ不穩ハ確カニ日本ノ勃興ガソノ動機ノ一ツヲ形作ツテナル英國人ガコ  
ノ現象ヲ喜バズシテ暗ニ日本ニ憚ル氣味ノアルモ亦一應尤モ次弟テアル  
又日本トシテモ却ツテアリガタ迷惑カモ知レヌ兎ニ角今後ノ日英同盟ハ復  
雜ヲ甚ク面白ヒ未來ヲ有シテナルノテアル。

印度ノ將來。

印度ノ亡國ニハ深イ歴史的ノ原因ガアル、印度人ノ悲境ニ陷ツタ罪ハ之レ  
ヲ英國ノ政策ニ歸スルガ寧ロ彼等自身ニ歸ス可キテアル、彼等印度人ノ中  
ヨリ此ノ墮落セル品性ヲ矯正スルニタルベキ偉人ガ現レナクレバ印度人ノ  
將來ハ駄目テアル、自カラ治メル能力ノナイ者ガ悲境ニ沈淪スルハ當然テ  
アル、イタヅラニ過去ノ歴史ヲ夢見其ノ哲學ニ誇リツ、續々トシテ現實界  
ノ亡者ヲイダシツ、アルノハ矛盾モ亦甚クシイノテアル、殊ニ青年ニシテ  
外國ノ空氣ニ觸レタ者ハ自國人ノ産業サヘ盛シニナレバ國運ハ直チニ進歩  
スルガ如ク思ヒ日本ノ勃興ノ實例ヲ見テ之レニナラント試ミ日本ノ歴史  
ト國民性ト國体トノ特殊テ他國ト異ナル所以ハ夢ニモ知ラナイノテアル、  
印度ガ人口面積ニ於テ支那ノ下位ニ在リナガラ支那ノ二倍以上ノ貿易ヲ營  
ミ産業モ金融モ交通モ發達シ、一般ニ國トシテ支那以上ノ進歩ヲ示シテ居  
ルノハ英人ヲ主トシテ他ノ外國人ガ文明的組織、建設的設備ヲ輸入シテ結  
果テアツテ決シテ印度人ノ力ト見ルコトガ出來ヌ、又印度人トシテハ當分  
將來ニチナイテモ不可能テアル故ニ印度人ハ故國ノタメ、ドウアツテモ英國  
人ノ力ヲカナケレバナラヌ又英國モ本國ノ利益ヲ計ルニハ眞ニ印度ヲ強  
大ナ國ニシナケレバナラヌ即チ印度人ノ國民性ヲ根本的ニ改善シノノ精神  
ヲ根本的ニ陶冶シテ之レヲ近代文明ノ域ニ導カナケレバナラヌ、印度人ノ  
勃興ハ英國ノ統治權ヲ危クスルト考ヘルノハ大ナル誤リテ英國ノ世界ニ於  
ケル地位實力ハ如何ニ進歩シタル印度人ヲモ統治シ得ベキ筈テアル若シ英

國政府テソレ丈ノ實力ガナイトスレバ印度人ノ反抗ガナクトモ英國ノ將來  
ハ甚ク危イノテアル、要スルニ印度ノ將來ハ國民ノ自覺ト英國人ノ努力ト  
ニヨリ益々改善セラル、モノテアルト思フ。(完)

## 雜報

近時米國學界の勢向  
米國に於ける學界の近情を聞くに彼が資金の豊  
富なるに任せ建築を壯麗にして徒に美觀を誇むることは既に過去の時  
代となり今日に於ては是等の資金を得るにも稍々困難の事情存するも  
の、如し、若し是等に向つて少しにても資金を得るの途あれば直ちに既  
設建造物の地下其他何れの地所を問はず些の空間をも利用し此に研究室  
を設備し多數篤學者を集め盛に各方面に渉る研究を爲し各々その業績の  
世表に現出せられんことに努力しつゝあり、殊に過般紐育市に於て開催  
せられたる第一回科學及近接社會學者米國大會の狀況を聞くに醫學の領  
域に於ては人類學、解剖學、生理學、藥物學、實驗病理學、細菌學、  
內科學、生物化學、實驗生物學等の各學會之に參會し其他植物、動物、  
化學、物理、天文、電氣化學、昆蟲學、器械學、顯微鏡學、心理、教育、  
經濟、農藝、數學、地理等の有ゆる學會之に參加し、コロンビア大學、  
コーネル大學、紐育大學の各講堂に於て合同的に或は分科的に開催せら  
れ此期に會する全米國の學者は實に無慮數千人を以て算せられ其勢實に  
凄まじき程にあり又其の演説の夥だしく且つ各其の内容の頗る研究的に  
して眞面目なること到底我學會等の遠く企及し能はざる所、殊に感想を  
強からしめたるものは同大會壇上に於て「今や全歐は殆ど戰亂の禍巻を

變じ學術上の進歩は秋毫も彼に頼む所無し、之を圖り獲るは獨り吾米國學者の努力にあるのみ」と。言明せられたるにあり、彼れ固よりこの曠古の機運に乗じて世界に於ける學界の覇權を握取せんとするの下心なるや疑を客れず、今同國學者がこの雄大なる目的に向つて學國一致の態度により奮身的邁進せるの意氣と其の間更に私情私議に驅らるゝものなきの美風は眞に欽仰に堪へざるものありと、以て我學界の人猛省數番の餘地なしとせんや。

●海軍々醫の缺乏

我海軍部内にありては近時著しく艦隊力を増し一面陸上勤務の従事者等に劇増を來たしたる結果軍醫官に多數の不足を來させる由なるが之れが補充上に就ては第一經費の關係もあり旁々一定の教育と相當の階級者を要するため一時に多數を採用し難き事情にあり是等の補充をなすには將來數年間に透り約五六百名づゝの新醫官を必要とすべく昨年度は少くとも四十名内外の依託學生と試験採用二十五六名を得るに非ざれば適當の配置をなし能ざる向なり而して本年度に於ける各醫育機關に依託されたるもの僅かに二十五名に過ぎざれば従て本年も約二十名内外を一般試験により採用すべしと云ふ。

●文部省の計畫案

警事公論の記載する處によれば歐洲の大戦は我國に向つて種々なる教訓を興へ惹いて國民の努力を促したること頗る多く就中醫學及び理工科に屬するものありては其の影響絶大なるものあり、從來未だ曾つて見ざりし獨逸の作戦及び經國の跡を聞いては驚きその科學の應用如何に盛なるかを知ると共に我國民は此方面に冷淡なりしを覺り奮奮努力の結果は亦た模倣の域を脱すること難からざるを曉るに至りしが前内閣時代一本文相は早く既に此事を看破し文部省も亦た袖手傍觀すべきにあらざる事を自覺し教育方面にも科學を奨勵すべく研究する處ありしが不幸にして其事未だ成らざるに前内閣は明渡の運命を負ひ爾來

打捨てられしが幸にも頃日來此議再燃し科學奨勵案に付き凝議する處ありし結果大正六年度の追加豫算として科學研究費として金參拾萬圓を計上し來る六月の臨時議會に提出する事となれり勿論民黨たる議會が之れに反對すべくもあらざるを以て案は正しく通過すべしと觀測せられつゝあり、而して右研究費支出の方法は今尙ほ協議中にて未定なるも醫學及理工科に限れる事は疑ひなく其れも未だ何等の業績なく曙光も現はれざる方面に向つては支出せざるべく少くも研究室裡に於ける學理及び實驗を經たるも、之れを實際大規模に應用するには相當多大なる經費を要するものにして其の成功の曉は天晴國利民福を増進すべきものたるべく尙ほ本案を提出する迄には醫科及び理工科の碩學に向つて一應の諮問あるべし、其の時こそ案の内容全部が世間に洩るゝ時機なるべしと傳へらる、賀すべき事といふべし。

●昨年中の醫師生産數

大正五年中の新規登録醫師は合計二千六百〇四名にして内大學及專門學校卒業千五百〇九名、外國醫學學校卒業三名、試験及第千〇九十二名なり尙ほ全年中醫籍を抹殺せられたるは八百四十六名にして結局千七百五十八名の醫師新に輩出せる事となれりといふ。

●衛生教諭特別任用

文部省は内務保健衛生調査會の希望に基き生理及衛生に關する各種教科書の改訂を行ふと全時に高等師範學校に於ける衛生擔任教授は専門家たる醫學士を任用し更に専門醫士に教員免狀を附與し中學及師範學校並に高等女學校に於ける衛生生理の教諭に特別任用せんとの意嚮あり目下内務、文務の両省に於て此が實施の方法に就き研究中なりと。

●第一回醫師試驗合格者

醫術開業試驗規則廢止後本年初めて施行したる第一回醫師試験に應ぜし日本醫學專門學校及び女子醫學專門學校卒業生にして合格せる者三十九名あり其内三分の二以上は女子にして男子の

合格者十二名に對し女醫二十七名を出せりといふ女醫諸子の得意や想ふべし。

●石川縣醫師會定期總會 四月八日午後一時より金澤市醫師會堂に於て開催、左の諸件を附議したり。

一、演説

二、三の大都市に於ける衛生狀態 米村吉太郎氏

二、庶務、會計、大日本醫師會、津田、太田、田中三氏表彰の各報告

三、建議案

本縣小松、七尾兩娼妓病院に細菌検査所を附設する件

四、提議案

一、關西醫師大會及び日本醫師會代議員選舉

一、會則第三十九條改正の件、本會へ離出額は會員一人に就きて五拾錢の割と爲すを參拾錢と爲すに改む

一、會則第四十四條變更の件、本會則を變更せんとするには醫師會の數六個以上代議員の同意あるを要す

五、協議案

一、「コレラ」豫防に關する件

一、前石川縣醫師會長山田謙次氏表彰の件

六、石川縣知事諮問案

一、肺結核患者の實際數を調査し、本縣に於ける本病蔓延の狀況を知らんこと、適當の方法なきや

一、癩患者の實況を知るに付確實なる調査方法如何

一、下痢患者の届出に對しては困難なる事情ありと聞く其實況如何

●金澤病院火災保險 金澤病院にては近來大病院の火災に逢ふ者あり殊

●最近大阪醫科大學病院の烏有に歸したるに鑑み今同先づ貳拾萬圓の保

險を附すべく決定し縣參事會へ此が掛金費豫算千圓を提出したるに愈々原案可決となりたり。

●金澤皮膚科集談會第十六回例會 大正五年十二月十二日午後七時より大手町醫師會堂に於て例會開催左の講演あり午後十時閉會せり。

一、微毒再感染の一例 澤田一 郎氏

二、稀有なる尿滲潤の一例 山田孝太郎氏

三、若年者の異常部位に發生せる老人性疣贅の一例 土肥章 司氏

●金澤外科集談會第一回例會 從來皮膚科合同にて金澤外科皮膚科集談會の名の下に開催せられたりしが今回同科分立することになり新に金澤外科集談會は其第一回例會を三月十二日午後七時半より大手町醫師會堂に於て開會左の講演ありて午後十時閉會せり。

一、一二の泌尿器結石「レントゲン」像ノ「デモンストラチオン」 飯森益太郎氏

二、皮角より發生したる表皮癌の一例 下平用 彩氏

討論 森田隼 三氏

三、再びマーテルング氏腕關節畸形に就て 下平用 彩氏

四、腸の伸展潰瘍の二例 七五三龜吉氏

●金澤病院醫事集談會第三十九回例會 三月十九日午後三時より本院眼科教室に於て開催左の講演あり午後六時閉會せり。

一、淋巴性白血病と縦膈竇腫瘍に就て 佐々木 醫員

追加 中村 教授

二、「アルコホール」の作用に就て 田村 部長

實 問 高安 部長

三、鼻中隔結核腫の一例 越村 醫員

校内消息

討論 土肥部長 中村教授 石川 醫員

四、肝膿瘍の一例附患者供覽  
追加 近藤 醫員 田村部長 那谷 醫員

五、腦動脈硬化症の原因  
討論 田村部長

校内消息

●昭憲皇太后三年祭式 四月十一日午前九時より本校大講堂に於て昭憲

皇太后御三年祭式を舉行せらる全刻生徒は兵式教官の指揮に従ひ式場に  
整列し尋で職員入場整列、襄帳せらるゝや職員及生徒一同最敬禮を行ひ  
後高安校長は最も嚴肅なる態度を以て恭く祭文を奉讀せられ職員及生徒  
最敬禮、次で校長玉串を捧げられ一同最敬禮の後式を閉ぢられたり。

●入學宣誓式 四月十四日午前八時本校大講堂に於て本學年新入學生の

ため入學宣誓式を舉行さる、定刻新入學生一同は例の如く兵式教官の指  
揮に従ひ入場、續て教授職員入場するや高安校長は莊重なる態度を以て  
勅語を捧讀せられ後新入學生の爲に本校生徒心得の五ヶ條を朗讀し懇々  
訓示を垂れ給ひ次で松原生徒監は全新入學生のため今後在學中心得べき  
要點を注意せられ次で校長は本校教授一同を紹介せらる、續て十全會理  
事下平教授は我十全會の組織、目的及規則の概要を説明し新入學生は入  
學と共に本會に加入すべき義務ある事を告示せられたり最後に新入學生  
は各教授の面前に於て前記生徒心得五ヶ條の下に各自宣誓書に署名し  
勅語御宸書の拜觀を許され午前十時式を終へたり、因に右新入學生とし

て全時に十全會通常會員となりし諸子左の如し。

醫學科第一學年 百十二名	
(本籍) 府縣 氏名 (出身中) (學校名)	(本籍) 府縣 氏名 (出身中) (學校名)
川神奈 倉橋 節夫 (厚木中學)	石川 安藤 茂雄 (金澤一中)
三重 西岡 雄彌 (三重四中)	富山 安井 二郎 (高岡中)
山形 高岡市五郎 (山形中)	福井 三崎 俊夫 (福井中)
東京 森脇 襄治 (三重一中)	長野 村瀬 武雄 (厚木中)
石川 飯田 正雄 (金澤二中)	北海 三宅 浩三 (旭川中)
富山 金子 十郎 (高岡中)	石川 西村 肇 (金澤一中)
福井 盛永 平 (大野中)	富山 中瀬 眞亮 (高岡中)
福井 五十嵐文治 (福井中)	北海 岡田 敏雄 (旭川中)
石川 道井他吉郎 (金澤二中)	富山 市田 文一 (魚津中)
福井 八木 義一 (福井中)	石川 渡邊 麗 (金澤二中)
石川 坂村 吉忠 (金澤二中)	三重 新家 徳信 (三重一中)
富山 女川 教恩 (魚津中)	鹿兒 瀨戸山三郎 (正則中)
富山 市田 賢吉 (富山中)	富山 八木 繁雄 (富山中)
石川 三浦外茂治 (金澤一中)	北海 菊地 省吾 (旭川中)
兵庫 三木 成章 (姫路中)	富山 永井 文平 (魚津中)
三重 村島 耕造 (岐阜中)	長野 柳澤 徳義 (上田中)
三重 後藤 成巳 (三重二中)	岐阜 高橋 庫吉 (斐太中)
愛知 木下 秀吉 (愛知三中)	愛知 井上 二郎 (愛知五中)
新潟 白井 萬司 (魚津中)	長野 松田 三一 (上田中)
福井 堀 久 (福井中)	岐阜 清水恒太郎 (大垣中)
宮城 大宮司義一 (東北中)	富山 小松 嘉門 (礪波中)
静岡 本多 芳雄 (都文館中)	山形 大塚 勇 (莊内中)

石川 本田 久吉 (金澤一中)	岐阜 牛丸 陸藏 (斐太申)
福井 相澤 正 (福井申)	石川 井關 好俊 (金澤一中)
栃木 高瀬四郎平 (宇都宮申)	愛知 大野 利雄 (愛知四中)
静岡 吉山 義嗣 (濱松申)	三重 駒田 誠一 (三重一中)
富山 中田 重仁 (富山中)	和歌 山 玉置 周介 (新宮申)
滋賀 小菅 愛三 (彦根申)	石川 村本 豐馬 (金澤一中)
長野 小口綾三郎 (大町申)	石川 上坂颯太郎 (七尾申)
島根 三原重三郎 (松江申)	三重 村上 賢三 (三重四中)
富山 杉澤 隆吉 (礪波申)	愛知 市川 正雄 (錦城中)
京都 福田 正材 (堺申)	岐阜 久保田敬吉 (大垣申)
新潟 野村 權一 (長岡申)	滋賀 高島 高文 (小濱申)
山梨 清水 一藏 (諏訪申)	栃木 印南 勇平 (大田原申)
石川 岩佐 健吉 (金澤二中)	富山 高澤 豐平 (高岡申)
石川 畠山 鋒成 (金澤二中)	富山 野口 隆正 (富山中)
長野 赤地 吉治 (長野申)	福井 伊藤 甚藏 (大野申)
島根 井上 勳 (松江申)	石川 北川 定義 (金澤二中)
石川 朝日 正夫 (小松申)	長野 飯島 龜雄 (長野申)
廣島 久保 完二 (忠海中)	富山 堀 謙三 (高岡申)
岡山 藤澤 卓之 (矢掛申)	長野 萩原 道三 (野澤申)
石川 生垣 省三 (金澤二中)	岐阜 森 健次 (大垣申)
神奈 遠藤 正治 (小田原申)	石川 大久保繁雄 (金澤一中)
川 田中 靜雄 (堺申)	新潟 大瀧 隆英 (有恒學舎)
大阪 津川 辰三 (金澤二中)	秋田 佐藤 榮 (秋田申)
石川 正善 泰 (金澤二中)	富山 川崎 順二 (富山中)
長野 柳澤嘉三郎 (野澤申)	石川 岩脇 吉榮 (金澤二中)

校內消息

長野 百瀬 重雄 (大町申)	石川 西本 利雄 (金澤一中)
石川 高田 至 (金澤一中)	栃木 荒井 金三 (大田原申)
石川 平野雄三郎 (金澤一中)	富山 永井 保次 (富山中)
德島 古川 克吉 (富岡申)	岩手 大森 良次 (盛岡申)
石川 牛圓新太郎 (松本申)	宮城 亙理 震 (仙臺二中)
福井 岩佐 久 (武生申)	滋賀 倉田 時治 (忠海中)
和歌 山 朝岡 武男 (和歌山中)	鳥取 松原 信行 (倉吉申)
大阪 吉本 一治 (八尾申)	富山 金森 精一 (魚津申)
愛知 賀古 弓弦 (愛知一中)	石川 池上純一郎 (七尾申)

藥學科第一學年 四十名

(本籍) 府縣 氏名 (出身申)	(本籍) 府縣 氏名 (出身申)
高知 岩松 勝美 (京都申)	愛知 森 三千夫 (愛知五中)
北海道 林 芳夫 (旭川申)	滋賀 若森 五郎 (膳所申)
山形 小池 清助 (莊內申)	千葉 大野 千里 (千葉申)
新潟 五十嵐莊一 (三條申)	石川 小原 君藏 (金澤一中)
滋賀 美濃部敏行 (膳所申)	愛知 垂水 茂 (愛知四中)
新潟 川口 利一 (卷申)	奈良 神田 義男 (郡山中)
長野 胡桃澤 潔 (長野申)	秋田 福田 豐人 (市ノ關申)
長野 須澤 保壽 (松本申)	大阪 鶴見 克己 (北野申)
山梨 小林 英一 (都留申)	三重 前田 弘義 (三重一中)
福井 阿部藤五郎 (武生申)	新潟 伊澤矩之介 (三條申)
三重 笠井 房雄 (三重一中)	山形 遠田 茂 (莊內申)
新潟 大關 泰造 (卷申)	鳥取 增谷 誤 (米子申)
奈良 谷 嘉 (五條申)	山形 上野 善信 (金澤一中)
奈良 高岡 八郎 (今宮申)	石川 木村 清重 (金澤一中)

- 福島 渡邊慶次郎(福島中)
- 山梨 小池 潤(日川中)
- 秋田 水口鉄太郎(秋田中)
- 兵庫 眞田 實(第二神戸)
- 石川 松林 幸三(金澤一中)
- 東京 中村政太郎(京華中)
- 奈良 藤田 憑三(郡山中)
- 石川 光木 豊一(金澤一中)
- 愛知 岩井 弘(愛知五中)
- 石川 三木貞治郎(小松中)
- 埼玉 酒井 中(埼玉中)
- 北海道 佐々木壽雄(札幌中)

●新入學生諸氏を迎ふ

新入學生諸君よ、諸君は既に中學の課程を終へ尙進んで我専門高等の學府に入り大に爲すあらんさし遂に陶汰競争の結果數百餘名の入學志願者中より撰ばれ抜かれたる處の健兒なり従つて吾人は諸君の前途を祝し光榮ある今日の初對面を欣ぶご全時に愈々身を醫學に委れ他日眞醫となり貴重なる人の身命を左右せらるゝに至る事を思へば諸子の任亦甚だ大なりといふべし、願くば諸子は入學式に於て校長閣下及生徒監より垂れられたる處の訓示を遵守し常に身体の強壯を謀り一意専心勉勵努力し本校規定の課程を終了せられん事を祈る、即ち諸子が郷關を出づるに際し謳ひたる處の「男子立志の壯句を忘るゝ勿らん事を、一言以て歡迎の辭となす。

●金澤醫學專門學校規則申改正 今回本校規則申左の通り改正せらる。

- 第三章第七條を削除し第八條を第七條とし以下第二十九條迄順次繰上く
- 第六章第三十條を第二十九條とし同條中第一項醫學科前期試問學科目の次へ左の但書を追加す

但前記科目の成績に生理學藥物學の學年試験に於ける得點を加ふ

第二項藥學科前期試問學科目中化學を削除し左の但書を追加す

但前記科目の成績に化學の學年試験に於ける得點を加ふ

第三十一條を第三十條とし以下第三十七條迄順次繰上く

第七章授業料の下に「及卒業受驗料」の六字を加ふ

第三十八條を第三十七條とし同條中第一項以下削除す  
第三十九條を第三十八條とし第四十條を第三十九條とし同條中第三項を削除す

第四十條として更に左の條項を加ふ

各學科卒業受驗者は各期試問に卒業受驗料として左の通り納付すへし

前期試問受驗料金參圓

納期日 自三月二十日至同月二十二日

後期試問受驗料金五圓

納期日 自四月十五日至同月十八日

但卒業試問に及第せざるもの翌年卒業試問に應ずるも受驗料を徴收せず

第四十一條として更に左の條項を加ふ

既納の金額は總て返付せず

第四十一條を第四十二條とし授業料の下に「及卒業受驗料」の六字を加ふ

第四十二條以下順次繰下く

●本學年各級長任命 本學年左の諸教授は夫々頭書の如く各學年級長を任命せられたり。

- 醫學科第四學年級長 教授醫學博士 下平 用 彩
- 醫學科第三學年級長 教授醫學博士 土 肥 章 司
- 醫學科第二學年級長 教授醫學博士 石 坂 伸 吉
- 醫學科第一學年級長 教授醫學博士 須 藤 憲 三
- 藥學科第三學年級長 教授 加 藤 靜 雄
- 藥學科第二學年級長 教授 林 常 雄
- 藥學科第一學年級長 教授 加 藤 直 三 郎
- 本學年各年級幹生 本學年各年級幹生左の如く任命ありたり。
- 醫學科第四學年 宮田 太喜男 村山 午朔 石川 濟

# 會 報

醫學科第三學年 上田 茂 今田俊英  
 中谷正知 中田又八 河本謹一郎  
 辻 二八 池田外喜男  
 同 第二學年 新井俊雄 瀨川吉雄 荒木道太郎  
 加藤美一 荒井嘉市 川島五郎  
 藥學科第三學年 中保恭一 藤本光之助  
 同 第二學年 富士谷玄吉 牛村知政

●十全會役員委囑  
 本學年十全會役員左の通り委囑せられたり。

理事 下平用彰

講話部長 須藤憲三

委員 川島 俊 柴野順吾 井上啓太郎

醫四 仲井芳雄 全 伊藤喜平 全 楠 教惠

醫三 中谷正知 全 近藤政義 全 辻出小左門

醫二 加藤美一 全 團野輝一 全 武居市重

醫一 三崎俊夫 全 森脇襄治 全 村瀬武雄

藥三 福富重雄 藥二 可知和夫 藥一 川口理一

雜誌部長 林 篤

委員 山本兵三郎 吉野 巖 越村甚次郎

佐伯義久 金子貞吉

醫四 駒田作兵衛 全 伊達文次 全 福田 孝

會 報

全 守 成一 全 藤城宜三 全 岡田新作  
 醫三 清河吉平 全 佐藤英一  
 學術實習部長 田村 昌

司療醫 松田 茂 那谷與一 近藤時男

森田隼三 石川寛二 佐伯義久

鹽村和喜男 淺井貞準 大城喜太郎

大脇彌平

調劑司 坪坂留松 全 赤 申吉 醫三 池田龜代士

委員 醫四 武内宗四郎 全 中田又八 藥三 吉村政一郎

庭球部長 土肥章司

委員 石川寛二 醫四 中西 孚 醫三 森田克巳

醫二 磯野泰一 醫一 清水一藏 藥三 熊取伊太郎

藥二 村上隆之助 藥一 小池清助 金子次郎

劍道部長 委員 加藤信智 醫四 齊藤 靖 醫三 大橋四郎

藥二 瀧川一忠 醫一 村田三郎 藥三 勝木 等

藥二 谷口甚一郎 藥一 三木貞治郎 兒玉豊治郎

柔道部長 委員 若林定次郎 醫四 堀 政明 醫三 横山 實

醫二 荒井嘉一 醫一 村瀬武雄 藥三 安田末松

藥二 工藤菊太郎 藥一 渡邊慶次郎 林 常雄

弓術部長 委員 加藤信智 醫四 登谷次男 醫三 鈴木英介

醫二 栗田 進 全 石川 盈 醫一 安藤茂雄

全 西岡雄彌 藥三 土肥政藏 藥二 小板橋誠一郎  
藥一 松林幸三

遠足部長

宮田篤郎

委員 若林定次郎

醫四 上出成之

醫三 河村金次

醫二 森 三郎

醫一 高澤豐平

藥三 長谷川英二

藥二 中山德一郎

藥一 増谷 謙

中村八太郎

相撲部長

委員 若林定次郎

柴野順吾

醫四 藏 香次郎

全 中谷三治

醫三 和田龜俊

全 西川義男

醫二 茅島 操

全 瀬川吉雄

醫一 三原重三郎

全 久保完二

藥三 杉山正夫

全 大和秀雄

藥二 山中隆之助

全 小泉 克

藥一 大關泰造

全 酒井 中

野球部長

加藤直三郎

委員 松田 茂

醫四 清水友次郎

醫三 阿部忠夫

醫二 加藤信香

醫一 中瀬眞亮

藥三 越島茂男

藥二 井上清七

藥一 福田豊人

代議員 醫四 宮田大喜男

全 今田俊英

醫三 池田龜代士

全 佐藤英一

醫一 新井俊雄

全 島田三郎

醫一 倉橋節夫

全 金子十郎

藥三 中保泰一

藥二 河村圭三

藥一 岩松勝美

書記 山本兵三郎

加藤誠四郎

安藤信次

安達友直

若林善太郎

准特別會員 左の両氏は今回十全會准特別會員として入會せられたり

金澤市古寺町一五

醫士 前田 道 貞君

金澤市新道五川北病院

醫士 增 田 穰君

十全會圖書室報 (第二十回)

醫科四學年 守 成一

昨年九月以降ノ寄贈圖書並芳名左記ノ如シ。

新撰生理衛生 上及下卷二冊

松下禎 二殿

人體解剖學 第二卷一冊

石川喜 直殿

クレンペル臨床診斷學 和製一冊

東京學 院殿

一、Augenheilkunde, Prof. Axenfeld.

一冊

二、Angenpraktis, R. Birkhauser.

一冊

診斷學 第十八版增訂後篇一冊

以上 石坂直次郎殿

消化器病 一冊

九州醫科大學雜誌部殿

新纂外科各論 增訂第十版第三卷一冊

下平 教 授殿

小醫化學實習 一冊

須藤 教 授殿

一、新撰婦人病學 一冊

二、精神病學集要 第二版前編

三、人性論 一冊

四、日本疾病史 上卷一冊

五、醫家必讀心理講話 一冊

六、山上海 一冊

七、現代心理學 一冊

八、精神病科ノ基本問題 一冊

九、銀海奇勝 一冊

十、自然科學 一冊

十一、優生學 一冊

十二、煮沸沈澱元 一冊

十三、醫海治療 一冊

以上

共同購買會殿

臨床症候學 一冊

田村 教 授殿

大正五年度卒業記念帖 一冊

岸 頁 一殿

新纂外科總論 增訂第五版一冊

下平 教 授殿



近世腦脊髓病學 一册

山田 鐵 藏殿

一、Die Immunitätsforschung im Dienste der Augenheilkunde.

Iohiack. 一册

二、眼科診斷學 增訂第三版、上及下卷二册

三、近世眼科細菌學 一册

以上

石坂直次 耶殿

開拓者 二月號 一册

金澤醫學基督教青年會殿

一、學士會月報 二十四册

(自大正四年一月至同五年十二月)

二、大日本私立衛生會雜誌 十二册

(自大正五年一月至同五年十二月)

三、日本國教大道叢誌 十五册

(自大正四年十月至同五年十二月)

四、臨床月報 十二册

(自大正五年一月至同五年十二月)

五、治療藥報 十二册

(自大正五年一月至同五年十二月)

六、醫海時報 十一册

(自大正五年一月至同五年十二月)

七、加越能時報 廿三册

(自大正四年一月至同五年十二月(內七月號欠々))

以上

高安會 長殿

一、今博士著 近世病理學總論 一册

二、今博士著 近世病理學各論 一册

三、山崎博士著 產科學 前及後編 二册

四、稻葉博士及小原學士共著 實用工業衛生學 一册

五、高田博士著 肺結核病早期診斷法要訣 一册

六、桑山及岸學士著 治療技術 一册

七、白木學士著 產科治療法 一册

八、松本學士著 臨床小外科 一册

九、三浦及木村學士著 新獨逸 一册

十、Max Künze, Lehrbuch der Gynäkologie. 一册

十一、 " Lehrbuch der Geburtshilfe. 一册

叙任及辭令

以上

新纂外科各論 第五卷 一册

藏光 教授殿  
下平 教授殿

### 叙任及辭令

● 內閣

(三月廿四日)

陸軍一等軍醫正從五位勳三等功四級 野口詮太郎 (二三)

任陸軍軍醫監

(四月十一日)

陸軍三等軍醫正八位 佐崎伊久 (三八)

任金澤醫學專門學校教授、叙高等官七等

● 宮內省

(三月十日)

叙正五位

從五位勳五等 敷波重治郎 (二七)

(三月廿日)

叙從六位

正七位勳六等 松王數男 (三三)

● 文部省

(四月十二日)

六級俸下賜

金澤醫學專門學校教授醫學博士 松原三郎

八級俸下賜

金澤醫學專門學校教授 林篤

年俸金五百圓下賜

金澤醫學專門學校教授 佐崎伊久

● 陸軍省

叙任及辭令

(三月二十七日)

陸軍一等看護長 宇山春藤(大正元) 全 永山昇一(全) 全 大島重雄(全) 全 神戸政雄(全) 全 大脇彌平(全) 全 六田芳輝(全) 全

糸川角次郎(全) 全 森田耕一(大正二) 全 渥美徳太郎(大正元)

任陸軍三等軍醫

陸軍一等看護長 久米川虎八(大正二) 全 西川他見男(全) 全 谷崎(全) 全

任陸軍三等藥劑官

(三月三十一日)

補步兵第七聯隊附

陸軍三等軍醫 奥野和三郎(大正五)

補金澤衛戍病院附

陸軍三等藥劑官 望月有隣(大正四)

●海軍省

(三月十六日)

特命檢閱使附被仰付

海軍軍醫大監 鈴木寛之助(二九)

(三月三十一日)

攝津乘組被免淺間乘組被仰付

海軍少軍醫 吉田憲吉(大正四)

●金澤醫學專門學校

(三月三十一日)

金澤醫學專門學校醫學士 内田豊咲(大正元)

産科學婦人科學講師ヲ囑託ス。月手當金貳拾圓給與

依願囑託ヲ解ク

金澤醫學專門學校講師 近藤清吾(大正四二)

依願囑託ヲ解ク

醫化學副手囑託 橋本學(大正五)

(四月九日)

金澤醫學專門學校醫學士 山本直枝(四二)

診斷學講師ヲ囑託ス。月手當金貳拾圓給與

(四月十三日)

依願囑託ヲ解ク 産科學婦人科學副手囑託 織田他家男(大正三)

●石川縣

(三月二十八日)

依願職務ヲ免ズ

金澤病院醫員 山村茂一(大正四)

(三月三十一日)

金澤病院醫員囑託 能木場與三吉(大正四)

金澤病院醫員ヲ命ス、十二級俸給與

(四月五日)

金澤病院醫員ヲ命ス、十二級俸給與

波々伯部重隆(大正二)

(四月九日)

年手當金壹千圓給與 金澤病院外科第一部長 下平用彩

金澤病院外科第二部長 下平用彩

年手當金壹千圓給與 金澤病院外科第二部長兼務ヲ解ク

金澤病院外科第二部長兼耳鼻咽喉科部長 宮田篤郎

年手當金壹千圓給與

金澤病院醫員 佐崎伊久

金澤病院外科第二部長代理ヲ解ク

(四月十一日)

事務ノ都合ニ依リ職務ヲ免ズ 金澤病院醫員 佐崎伊久

(四月十八日)

金澤醫學專門學校教授 佐崎伊久

金澤病院醫員ヲ囑託ス



今回佐々木と改姓せらる。

●青木正枝氏(明治廿七) 越中伏木長谷川病院副院長を辭し今回富山縣

西礪波郡津澤町養輪に於て開業せらる。



告

●自大正六年二月廿一日校外特別會員會費納付調書

至全

四月廿八日

金額	期限	氏名	金額	期限	氏名
金貳圓五拾錢	大正六年度分	宮森 基殿	金貳圓五拾錢	大正六年度分	關 嘉一殿
金貳圓五拾錢	全	佐野 雄平殿	金貳圓五拾錢	全	知原 完治殿
金貳圓五拾錢	全	須崎 敏雄殿	金貳圓五拾錢	全	吉野 九郎殿
金貳圓五拾錢	全	岡山 三郎殿	金貳圓五拾錢	全	柏木 正章殿
金貳圓五拾錢	全	瀧上 伊織殿	金貳圓五拾錢	全	中谷林左衛門殿
金貳圓五拾錢	全	高橋 一郎殿	金貳圓五拾錢	全	毛利 元隆殿
金貳圓五拾錢	全	安仲 秀雄殿	金貳圓五拾錢	全	藤邑 左京殿
金貳圓五拾錢	全	堀木 勇治殿	金貳圓五拾錢	全	山本 辰吉殿
金貳圓五拾錢	全	廣野加藤次殿	金貳圓五拾錢	全	岩倉 以丙殿
金貳圓五拾錢	全	山元 文吾殿	金貳圓五拾錢	全	吉田 幸平殿
金貳圓五拾錢	全	奥澤 寛次殿	金貳圓五拾錢	全	三浦大三郎殿
金貳圓五拾錢	全	横井英太郎殿	金貳圓五拾錢	全	林 眞學殿
金貳圓五拾錢	全	坪田 耕造殿	金貳圓五拾錢	全	林 信行殿
金貳圓五拾錢	全	宮地 勝郎殿	金貳圓五拾錢	全	山崎喜代作殿
金貳圓五拾錢	全	繁田 源信殿	金貳圓五拾錢	全	赤祖父三郎殿
金貳圓五拾錢	全	北村久太郎殿	金貳圓五拾錢	全	青木 兵三殿

金貳圓五拾錢	大正六年度分	村田 義四殿	金貳圓五拾錢	大正六年度分	棚橋巳之助殿
金貳圓五拾錢	全	船越 光彦殿	金貳圓五拾錢	全	荻野 米藏殿
金貳圓五拾錢	全	藤野幸太郎殿	金貳圓五拾錢	全	村上 正徳殿
金貳圓五拾錢	全	垂水 正保殿	金貳圓五拾錢	全	秋永 靖海殿
金貳圓五拾錢	全	中橋 賢造殿	金貳圓五拾錢	全	田村政太郎殿
金貳圓五拾錢	全	富居 恒松殿	金貳圓五拾錢	全	福西 泰永殿
金貳圓五拾錢	全	藤原 嘉瑞殿	金貳圓五拾錢	全	井東 勇殿
金貳圓五拾錢	全	毛利久五郎殿	金貳圓五拾錢	全	齊藤 久保殿
金貳圓五拾錢	全	坂東 三範殿	金貳圓五拾錢	全	家城 秀哲殿
金貳圓五拾錢	全	横田 豊治殿	金貳圓五拾錢	全	山本 專二殿
金貳圓五拾錢	全	高山 茂樹殿	金貳圓五拾錢	全	中神田 積殿
金貳圓五拾錢	全	神吉 淳殿	金貳圓五拾錢	全	隅越徳太郎殿
金貳圓五拾錢	全	服部 秀雄殿	金貳圓五拾錢	全	中井 光藏殿
金貳圓五拾錢	全	廣橋 惺殿	金貳圓五拾錢	全	寺田 正周殿
金貳圓五拾錢	全	花井 正良殿	金貳圓五拾錢	全	渡邊 稠雄殿
金貳圓五拾錢	全	窪田 忍殿	金貳圓五拾錢	全	藤田 士郎殿
金貳圓五拾錢	全	土肥秀太郎殿	金貳圓五拾錢	全	柿野二太郎殿
金貳圓五拾錢	全	鷺塚 政光殿	金貳圓五拾錢	全	伊與美代丸殿
金貳圓五拾錢	全	林 盛胤殿	金貳圓五拾錢	全	二木 太吉殿
金貳圓五拾錢	全	坪川 實殿	金貳圓五拾錢	全	河合 眞治殿
金貳圓五拾錢	全	金田 靜治殿			
金五圓也	自大正六年度				高 森 友 正殿
金五圓也	自大正七年度				近 藤 清 吾殿
金五圓也	自大正七年度				大 口 富 治殿
金五圓也	自大正七年度				

# 廣告

謹啓各位益々御多祥奉大賀候陳者先ニ上田教授御辭職ノ節謝恩紀念トシテ物品贈呈ノ計畫一部有志間ニ發起仕リ候處幸ニ各位諸彦ノ甚大ナル御同情御寄附ニ預リ發起人一同深ク感謝罷リ在リ候然ル處其後種々ナル事情ニ碍ゲラレ決算報告甚遲延仕リ各位ニ對シ誠ニ申譯無キ義ニ御座候今同同教授ニ對スル贈呈紀念品モ漸ク出來仕リ候ニツキ此機會ヲ以テ精算報告仕リ且右紀念品ハ各位ヲ代表シ委員總代ヨリ教授へ贈呈仕候ニツキ左様御承諾相成度右不取敢御報告申上候也

尙贈呈物品ハ裏面寫真ノ通リニ有之候左ニ明記仕候

一金 側懷中時計

壹 箇

一金 及白金合製鎖

壹 具

一金 メタル (表月桂樹ニ紀念ノ文字、裏金澤醫學專門學校卒業生有志ノ十三字象眼)

一額面銅像

壹 箇

一金 百廿貳圓廿四錢也

大正六年五月

## 決算報告

發起人總代

一金六百七拾壹圓拾貳錢	收入金額總計	六拾圓	銅像額面
內譯 六百五拾六圓五拾壹錢	寄附金額總計	拾圓	額面鑄像者へノ謝禮
拾四圓六拾壹錢	利子	百七拾五圓	金側懷中時計
一金五百四拾八圓八拾八錢	支出金額總計	百六拾九圓	金鎖
內譯 百〇五圓〇參錢	通信費及雜費	貳拾九圓八拾五錢	金メタル
差引金百貳拾貳圓貳拾四錢也			

